エルフ族の場合

アパッチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
エルフ族の場合

【Ｎコード】
Ｎ０２９０Ｓ

【作者名】
アパッチ

【あらすじ】
自然溢れる異界“オポネシア”。そこには多種多様な種族が存在していた。・・・そして此度語るはエルフ族の少年のお話。可愛らしい外見に、小さな体躯、健気に今日も生きている。
生まれてこの方両親以外のエルフ族に出会ったことのない少年はある時運命的な出会い・・・と言えなくもない出会いを果たす。
そこから始まる波乱と、愛情と、苦難と、ちょっぴりのえっちぃ成

分が織り成す少年の物語。

ごゆるりとお楽しみください。

そして少年は一人になった（前書き）

異界“オポネシア”の世界観については、別途投稿しておりますので、よろしければ御覧ください。

※（ただこの世界観をお読みにならなくても、話の内容は分かると思いますので、その点はご安心ください。）

※不定期更新（途中で投げ出すようなことは絶対に致しませんので、そのあたりだけはご安心ください。）

※（第一部のみ3人称視点ですが、基本主人公の1人称視点で物語を進めていこうと思っています。）

そして少年は一人になった

ここは異界“オポネシア”

私たちの知らない地球でのお話。

此度語るはエルフ族の物語。

どうぞごゆるりとお楽しみくださいませ。

――――――

一人分の洗濯。量もあまりないためにすぐに干す作業が終わる。

「それじゃあ早速、朝ごはんの調達にでも行こうかな。」

誰に言うでもなく、しかし自然と口をついて出てくる独り言にその少年は一瞬、物憂げな表情を浮かべる。

しかし、それも一瞬のことで、すぐにいつもの明るい笑顔を浮かべ、罠にかかった獲物を入れるソリと水にいくらかの携帯食料を準備する。

「今日は～♪なにが獲っれっるっかな～～♪」

少年は準備が終わるやいなや、そんな鼻歌を歌いながら森の中へと入っていく。

道なき道を、まるでそこに道があるかのようにすいすい進んでいく少年。

少年がこの森に住んで１８年という歳月が経ち、ここいら一帯を遊び場にしていた少年にとってこの森は勝手知ったる我が家のようなもの。

そうでなくてもホワイトエルフ族の少年にとって、森とはとても身近な存在であり、その中を自由に行動することなど造作もない。

古来よりエルフ族とは森とともにあり、森の声を聞くことができる

という。

とりわけエルフ族の中でも、初期に派生したホワイトエルフ族とダークエルフ族は祖先の力を強く受け継いでおり、木々や動物たちと会話ができるという。

そう、そのホワイトエルフ族の少年にとって長年すみ続けているこの森は、いわゆる家族のようなものなのである。

ホワイトエルフ族の特徴である、雪のように白い肌と白銀の髪の毛が陽光を反射し、まるでそこに妖精がいるのではないかと思ってしまう。

まして、その少年は美しかった。

肩口まで伸びた白銀の髪に、健康的な白い肌、そしてまるで女の子のような可愛らしい顔立ち。

そして１８歳にしては少し・・・というか大分低い身長がまたその少年の可愛らしさを増長させていた。

もっともそれらの特徴が少年にとってはコンプレックス以外の何者でもないというのが、昔からの少年の強い主張であり、特に身長に関してはあまたの努力を重ねてきており、今もなお現在進行形で努力し続けている。

その健気な姿がまた少年の可愛らしさに拍車をかけていることに彼は気づいていない。

いや、気付かせてくれる人がいないというのが正しいか。

少年は一人だった。

もちろん、少年には両親がいた。

とても優しく、暖かい家族だった。

純粋なホワイトエルフ族はその絶対数が少ないため、１００人規模の村単位、あるいは家族単位での生活形態がほとんであった。

あまたある種種のエルフ族は、同じエルフ族同士ならその間に子を作ることができる。

しかし、プライドが一際強いホワイトエルフ族は他のエルフ族との子作りをよしとしなかった。

もちろん全てのホワイトエルフ族がそのような考え方を持っていた訳ではなく、その少年の両親も偶然好きになった相手がホワイトエルフ族同士であったというだけで、そのような考えを持ってはいなかったのだが。

そのような歴史があったためにホワイトエルフ族全体が他のエルフ族を避けるようになり、またその逆に他のエルフ族も彼らを避けるようになった。

結果的にホワイトエルフ族は大きなコミュニティを作ることができなくなり、その絶対数が少なくなり、今では１００人規模の村単位、または少年のような家族単位で孤立してしまう者が生活形態のほと

んどを占めるようになったのである。

閑話休題

その少年が１１才の誕生日をむかえようという時にそれは起こった。

今日は少年の誕生日。

毎年この日は、父が山で獲った大きな獲物を使った贅沢な料理を食べ、母からは手作りプレゼントを貰っていた。

少年はこの日が楽しみだった。

暖かい手料理に、父さんの狩での自慢話、その話を聞いて微笑む母さん、そして母さんからの暖かい贈　り物。

今年もそんな楽しい日が迎えられると思っていた。

「父さん。本当にいっちゃうの？」

その日は雨だった。

それもスコールと読んでも差し支えないほどの激しい豪雨。

時折響く雷鳴と激しい雨音がその激しさを物語っていた。

「ああ、今日はなんといってもアナの誕生日だ。・・・安心しなさい、絶対にこんなぐらい大きな獲物を　獲って来てやるからな！」

そういって父さんは両腕を左右一杯に伸ばして見せた。

そう、いつもならその少年・・・アナの誕生日が近付いてくると、父さんは事前に大物を狙って狩を行い誕生日に備えるのだが、今年は天候状態が芳しくなく、なかなか狩りにいくことができなかったのである。

そのため少年の誕生日当日まで狩に行くことができなかったのであるが、それではだめだと少年の父は　この激しい雨の中狩りに向かおうとしているのである。

「あなた・・・気をつけていってきてね。」

心配そうな表情をしながら母は携帯食料を父に手渡す。

一度決めると梃でも動かない、そんな頑固な一面を持つ父の性格を熟知しているのアナの母は、引き止めたい気持ちを抑えて、ただ父の無事を祈って見送ることにした。

「ああ、お前も驚くぐらいの大物を獲ってくるからな。」

そう言うと父は、にかっと歯が見えるぐらい豪快な笑みを見せた。

「父さん・・・」

アナは心配そうな顔をして、大柄な父の顔を仰ぎ見る。

「・・・」

そんなアナの頭をまるで熊の手のように大きくて、ごつくて、暖かい、アナの大好きなその手でくしゃくしゃに撫でまわした。

自然とアナは少し笑顔になり、その笑顔を見届けて父は森の中へと行ってしまった。

ザァァァァーーーー、ゴロゴロォォオーーー！

一向に止まない雨と雷。

父が出発してから間もなく6時間が経とうとしていた。

森に慣れているエルフ族、ましてやその身体能力は人間族の数倍にあたり、狩りの名手である父はどんなに遅くなっても5時間ぐらいで狩りから戻ってくる。

「父さん、遅いね。」

不安は募り、ついにはアナの口からその不安が言葉となって漏れ出た。

すると母はそんなアナを安心させるようにその体を後ろから抱きしめた。

「大丈夫。・・・大丈夫だよ。」

母はまるで自分に言い聞かせるようにそう少年に言い聞かせた。

そして、終には父が戻ることはなかった。

アナは泣いた。

しかし、母は泣かなかった。

父がいなくなってから1年。

母はアナに一人で生きていけるように狩りや料理に、森に関する知識などあらゆることを短い期間に教えていった。

そして、父がいなくなって間もなく2年が経とうとした時。

母は旅立った。

父を探すために。

母が、父を探しに行くためにアナが一人でも生きていけるようにアナを育てていたのは、アナにも理解できていた。

母は無理をしていた。

アナに笑顔を向けてはくれるが、それが以前のような心からの笑顔でないことは子供のアナからすればすぐに理解できた。

それでもアナを大切に育ててくれる、優しさを向けてくれる母がアナは大好きだった。

そんな母が本当に心からまた笑えるようになれるのなら、一人で生きようと思った。

だから母が

「アナ、お母さんね。・・・お父さんを迎えにいってくるわ。・・・

ごめんね。アナを一人にして。」

告げたとき。

「ううん。母さんは何も心配しないで。僕なら全然大丈夫だから。・・・ずっと、ずっとこの家で待ってるから。」

とアナは笑顔で母を送り出した。

母は泣いていた。

それは・・・・父さんがいなくなってから初めて見た涙だった。

そして少年は一人になった（後書き）

初めての小説投稿です。

初めましてアパッチです。

小説なんて生まれて初めて書きました。もちろん・・・勉強してません！

なのでいろいろ至らない点ばかりだとは思いますが、生暖かい目で見守ってくださいませ。

また誤字・脱字などなど、ここをこうした方が良いかも！とかいうのがあればどうぞ遠慮なくお知らせください。

それでは、ここまで読んでくださいましてありがとうございました。今後ともよろしくお願いいたします。m（＿＿）m

・・・あっ、次回から挿絵入るよ！・・・拙い絵ですけど、よろしければ御覧になってくださいね。

そして少年は出会った

落とし穴

これほど単純かつ効果的な狩猟の罠はないんじゃないだろうかと、僕はそう思う。

・・・思うだけで本当はいろんな罠があるんだけどね。

ただ、大きな獲物・・・例えばイノシシや鹿などを狙うときはこの落とし穴を使う。

僕はエルフ族で身体能力も数ある種族の中でも高いはずなのだけど、体格がその・・・小さい。

１８歳になった今でも１５０ｃｍあるかどうか。

いくら身体能力が高くて、身軽でもやはり地の力が弱く、一人で大物を狙うのはどうしても難しい。

でも落とし穴だと、中に杭を仕掛けておくことで獲物に傷を負わせ弱らせることができる。

あとはその弱った獲物の急所を突いて獲物を獲るって訳だね。

「何かかかってるといいなぁ。」

僕はまだ見ぬ獲物に期待を寄せながら、罠を仕掛けたポイントへ向かう。

「今日はなんたって特別な日・・・だからね。」

そう今日は・・・母さんが旅立った日。

母さんが旅立って7年。

僕は毎年この日だけは、無理をして大きな獲物を獲って、一人にしては豪勢な料理をたくさん作る。

母さんと父さんが帰ってくることを祈って。

二人が帰って来たら、この料理をご馳走してあげるんだ。

僕は今でも信じている。・・・二人が元気な姿で帰ってきてくれるのを。

そうこうしている内に、第一の罠を仕掛けたポイントへと到着した。

「・・・はぁ。」

結果は・・・

僕が丹精こめて作った落とし穴が、周りの自然に溶け込んだ見事なカモフラージュした姿を、今もそこに示してくれている。

・・・つまりがスカ。

落とし穴の位置を知らせる石の目印だけが、静かに鎮座していた。

まるで僕を小馬鹿にするかのように。

「・・・って考えすぎ。」

うん、こんなことはよくある事、気を取り直して次の罠ポイントへと向かおう。

第2罠ポイント・・・スカ

第3罠ポイント・・・・スカ

第4罠ポイント・・・・・スッカスカ

「な、なんでよーーーーー！！！」

僕は咆哮した。

だって、だってだってだって。

獲れないんだもん！

いや、自然相手だからそういうこともあるだろうけど、でもこんな大事な日にそれはないよ。

これでも僕はこの森のことを知り尽くしているつもりだ。

どんな動物がどのルートを使って森を移動するのかも知っている。

加えて森の木々の声を僕は聞くことができる。

彼らの話も参考にして、僕の知識も総動員して仕掛けた罠。

これだけ豊かな森なら、それだけのことをして獲れないということの方が珍しかった。

「・・・いや、まだだ。まだあと一つ罠は残ってる！」

そうだ。まだ終わったわけじゃない。

「あきらめないよぉおお！」

＞ｉ２０７０１―１７２８＜

・・・お、終わってたら、もう自分で狩りに行ってやるもんね！
僕は半ばやけになりながら最後の罠ポイントへと向かった。

「・・・はぁ。」

・・・だめ・・・でした。

僕の目の前には半壊状態の落とし穴があった。

つまり、ここを動物が通ったが、片足だけ引っかかって辛くも助かってしまったのだ。

「・・・まぁ、あれかな。7年もやってきてずっと獲物が獲れ続けてたのが奇跡だったのかな。」

確かに事前に獲物をとっておくのが利口なやり方だとは思うけど・・・うん、実は獲ってました。

でもね・・・うん、おいしそうだったんだよ。

食欲は人の・・・というかエルフ族にとっても3大欲求のひとつで、

とりわけ僕はこの食欲が強い。

つまり、食べるのが大好きなんだ。

こんな小さな・・・小さくないやい！・・・体で毎食大人3人分はたいらげてしまう。

・・・しかし背は伸びない。

神様、怨んでいいですか？

「う～ん、これは本格的に自分で狩りにいかないといけないのかなぁ。・・・・ん？」

少し落ち込んでいる僕は、落とし穴の傍らに転がっている茶色い何かを見つけた。

「？これは・・・獣の糞。・・・それも暖かい。」

まだ近くにこの落とし穴に落ちそびれた獣がいるのかな。・・・よし！

「いっちょ僕の本領を見せ付けてやる！」

ーーーブヒャァアアア！

「・・・・え？」

すぐ目の前、そこにある草むらから突然大きな鳴き声が聞こえた。・・・ブヒ？

ーーーがさがさがさ

そこから一匹の獣が現れた。

それは・・・

「い、いのしし？」

なんで疑問系になってしまったのか。

シルエット、外見、それはまぎれもないイノシシであった。

＞ｉ２０７０２ー１７２８＜

しかしね、そのね。・・・お、大きいんだよ！

そうそのイノシシは大きかった。

僕が今まで見た中でダントツにね。

まぁ、確かに昔父さんが５００ｋｇのイノシシを獲ってきた時はそれは驚き喜んだものだけど。

いざそんなのの生きた姿を目の当たりにすると、もう恐怖しか沸いてこない。

しかも・・・なんだか怒ってらっしゃる？

ぶふぅ、ぶふぅ。

その巨大イノシシは荒い息を上げながら一歩また一歩と近付いてくる。

・・・ああ～、なるほど。

落とし穴をしかけた僕。落とし穴に落ちかけたイノシシ。・・・・・ね？

「・・・うん、それじゃあまずは・・・・」

「逃げろぉぉおおおおおおおおーーーーー！！！」

ぶひゃぁぁぁぁあああああああああああああ！！

＞i20700－1728＜

もう全速力！

木々の間を縫い、時には枝から枝へと跳びまわり、ターザン顔負けな速さで森を駆け抜ける。

しかし・・・

ぶひっ！ぶ、ぶひゃあぁあああああああああああ！

＞i20707—1728＜

イノシシはついてくる。

ぴったりと。

そう、イノシシは最短距離を駆け抜けてくる。

いくら僕が器用に森を駆け抜けていこうと、直進できる訳ではない。

一番効率の良い逃げ方をしているだけだ。

しかし、その巨大イノシシは・・・

どんっ！バキバキバキバキ！！どーーーんっ！

木々をなぎ倒し、岩をもその牙をもって砕き、最短距離で僕を追いかけてくる。

道なりに行く僕と、道を作っていくイノシシ。

あれだけ派手にぶつかりながらも、全く速度を落とさず追いかけてくるイノシシ。

「ひっ、ひぃいいいいいい！」

徐々に縮まる僕とイノシシの距離。

こ、このままじゃ追いつかれる！

普通サイズのイノシシでさえ軽く大人を吹き飛ばす突進力を持つという。

それがこのサイズになると、追いつかれたときの自分の未来を予想し身震いをする。

「どうしよどうしよどうしよどうしよどうしよう〜〜〜」

「・・・はぁはぁはぁ」

どんどん息が乱れてくる。

呼吸も口呼吸が多くなってきた。

「まッ・・・はぁ・・・たく・・はぁ、どんな・・・体力・・・してんだ、あの・・いの・・し！」

かれこれ数十分は走ってるのではないだろうか。

いくら野生の動物だからって、エルフ族の僕よりも高い持久力を持ってるなんて。

うう～、これは本格的にやばいかも。

「はぁはぁはぁ・・・あっ！？」

とそんなことを考えていると、疲労のたまった足がもつれた。

「あぶっ！？」

そして盛大に頭から地面へと突っ込んでしまった。

すりむいた額と腕に血がにじむが、そんなことを気にしている場合ではない。

ぶっ、ぶひゃあぁぁぁあああああああ！！！

「うわぁぁぁあああ！！？？」

そしてその隙に僕とイノシシの距離はゼロへと限りなく近づき、もうイノシシは目と鼻の先。

あと数秒後には僕の体は、ぐちゃぐちゃのミートパイになっちゃうのかなぁ。

恐怖に声をあげながらも、頭の中では冷静にそんなことを考えてい

る。

そしてその時が訪れる。

「うっ！！」

目の前の恐怖に瞬時に目をつぶり、来る激痛へと備えた。

・・・１０秒経過

・・・あれ？痛くない。

イノシシが飛び掛ってきた瞬間、咄嗟に目を閉じたのだが。

いくら待っても痛みがやってこない。

もしかして僕・・・痛みも感じずに逝っちゃった感じですか？

それはそれでアンラッキーなのかな。

そんなことを考えながら、うっすらと目を開けてみると目の前には。

「イノシシが・・・倒れて・・・る？」

そう、僕の僅か１m先でそのイノシシは体を横たえていた。

「どうして・・・あ。」

良く見てみるとその額には一本の矢がささっている。
それも見事にイノシシの急所をピンポイントでだ。
きっとこのイノシシは自分が死んだと思う間もなく天に召されたことであろう。
「でも、いったい誰が・・・」
ーーーがさがさがさ
「！？」
すると突然、頭上の木の枝が揺れだし、そしてその木の葉の影から何かかが地面へと降り立った。
それは・・・
「だ、ダークエルフ？」

＞i20703ー1728＜

そして少年は出会った（後書き）

ここまで読んでくださり誠にありがとうございますm（＿＿）m

うん、もうね、イノシシ怖いよね。・・・でも美味しそうだよね（＾ω＾）

食べてみたい。

そして少年は2度意識を手放した

「ダークエルフ？」

そう僕の目の前には一人のダークエルフ族の女性が立っていた。

ダークエルフ族の特徴である漆黒の肌に、陽光を反射してキラキラと輝く雪のように白い長髪が映える。

まして目の前にいるダークエルフの女性は美人であった。

目元は鋭く見るものによっては少し冷たい印象を受ける者もいるかもしれないが、整った顔立ちにスラリとした体躯、そして・・・平均・・・は知らないけど、胸にある美しい大きな双丘。

弓をもって佇む姿はまさに戦乙女を彷彿とさせるようであった。

しばらくその姿に見とれていたが、はっと今の状況を思い出した。

イノシシの額に刺さる矢、そして弓を構える女性。

「そっか、お姉さんのおかげで僕は助かったんだ。」

僕はお礼を述べるために立ち上がろうとした。

「イタッ！」

ううう、こけた時に擦り傷を負っただけじゃくて足もひねってしまったのか。

再びうずくまる僕にそのお姉さんはゆっくりと近付いてきた。

「ごめんなさい、ちょっと足をひねっちゃったみたいで。」

そのように少し苦笑いを浮かべながらお姉さんに話しかける。

そして申し訳ないと思いながらその場に座ったまま、まずは自己紹介かなと思い、自己紹介を始めようとした。

「あの僕はホワイトエルフ族のアナっていいま・・・すっ!?」

僕の目の前にまで歩み寄ってきたお姉さんはひょいっと、軽々と僕の体を片腕で持ち上げるとそのまま右肩に担いでしまった。

「え?・・・ええ!?」

僕は何がなんだかわからないままそのお姉さんの肩の上でうろたえていた。

「ちょっ、ちょっと!お姉さん!?」

「・・・」

返事はない。

お姉さんは黙りこくったまま、地面に転がるイノシシの両脚を左手で掴むと、そのまま１８０度方向転換した。

そして来た道を戻るかのように、右腕に僕、左手にイノシシを携え

て歩みを進める。

「ちょっ！お姉さん！お姉さんったら！！どこいくの？っていうか降ろして！なんか恥ずかしいよぉ！」

「・・・」

「無視！？無視ですか！これだけ大声だして無視されると初対面でもすごく堪えるんですけど。」

「・・・」

うう～、何もしゃべってくれない。

こうなったら！

「うりゃあ～～～！」

僕はお姉さんの腕の中で腕をばたばた、脚をばたばたと動かして降ろしてアピールを体で行った。

しかし・・・

「・・・」

そのお姉さんは全く微動だにしない。

それどころか僕が腕の中で暴れているのに、全然バランスを崩さないし、顔色一つ変えない。

どうやら見た目の美しさだけでなく、身体能力的に見てもこのお姉さん、ただものではない。

「うう～、ボディランゲージどころか、物理的な抵抗まできかないなんて。」

そして、そのお姉さんの沈黙は僕に余計な考えを呼び起こさせていく。

「・・・もしかして、僕も獲物的な立ち位置なわけ？」

僕はお姉さんの肩に頭が後ろを向く格好で担がれているので、自然と地面を引きずられながら運ばれるイノシシが目に入る。

「・・・」

思わず今の自分の立場と重なってしまう。

「・・・・い、いやぁぁぁぁぁぁぁ！食べられるの！？そのイノシシと同じ釜の飯にされちゃうの！？」

「同じ鍋で骨まで煮込まれちゃう感じなの！？・・・いやだぁぁぁぁぁ！誰か助けてぇぇぇぇ！！」

一度抱いた不安は更なる不安を呼び、ただただよからぬなんの根拠もない予測ばかりが次々と思い浮かぶ。

「いやいやいやーーーー！！・・・うっ！？」

ガクリ

「・・・うるさい」

＞i20704―1728＜

意識が途切れる寸前、左手を手刀の形にして少し眉根を寄せるお姉さんの顔が見えた。

「ぺろぺろぺろ」

「う、うにゃぁ～」

「・・・・・かわいい」

「ぺろぺろ、ぴちゃぴちゃぴちゃ」

「う、うう〜〜〜ん、にゃぁ〜〜」

「・・・・・／／／／！」

うう〜〜ん、ほっぺたが・・・ちべたい。

それになんか、時々生暖かい感触が・・・

「ぴちゃぴちゃぴちゃ」

・・・ぴちゃぴちゃ？

「うっ、う〜〜〜ん」

徐々に意識が覚醒し、閉じていた瞼を開いていく僕。

「ぺろぺろぺろ」

そして目の前に飛び込んで来た光景に僕は・・・

「・・・きゃっ」

「・・・・？？」

「キャアアアアアアアアアアアアアアアアア！！？？」

絹を裂くような女の子のような悲鳴を発してしまいました。・・・

は、恥ずかしい！

だ、だってしょうがないじゃないか！

目を開けたら目の前に舌を出した艶めかしいというか、妖艶という

か、そんな言葉がぴったりあてはまる美人のお姉さんがいるんだよ！

「・・・・ぺろぺろぺろ」

しかも突然の僕の悲鳴にも一瞬だけ動きを止めただけで、また僕の

顔を舐め始めるし。

「ちょちょっ！ちょっと！？」

僕は急いでそのお姉さんの下から這い出し、今更気付いたが、寝か

されていた簡素なベッドの端まで逃れた。

「ちょっと、お姉さんは誰！？っていうかここはどこ！？僕は・・・

アナ・・だね。」

うん、記憶喪失とかはしていないようだ。

ということは、記憶にないこの場所はやっぱり目の前にいる人物の

家ということになるのだろうか。

そうして改めて目の前の人物に見る。

すると、先ほどの僕の疑問はどこ吹く風で、ベッドから降りるとそそくさとどこかへといってしまった。

「・・・な、なんだったんだ。」

そう思いながらとにかく現状把握しなければと周りを見回す。

そこは8畳ぐらいの木造の部屋で、主にベッドと小さい円形の机に、服を入れるためのタンスのようなものがあるだけの簡素なものだった。

「ここに・・・一人で暮らしてるのかな？」

そんなことを考えながら部屋を見回していると、再びベッドの向かいにある扉が開いた。

「！？」

またベッドの端で固まっていると、なにやら湯気の上がる器を持ってきたそのお姉さんはこちらへ手招きをした。

こっちへこい・・・ってことだよね

「・・・おいで」

慣れていないのか、少し不器用な笑みを浮かべながらそうお姉さん

は諭した。

ずっと無視されてたから言葉が通じないのかもって思ったけど、そうではないらしい。

そもそもエルフ族の間ではほぼどの種族でも共通の言語が用いられているので、言葉が通じないことはよほど隔絶された土地に長年住むエルフ族にでも会わない限りあまりない。

「・・・うう」

なかなか自分の所へ来ない僕を見て、そのお姉さんは少し悲しい顔をする。・・・ちょっぴりかわいい

「わ、わかったよ。いくよ。いきます。いかさせていただきます。」

「・・・・」

にっこり笑顔・・・といっても、やはり慣れないのかどこかぎこちない。

それでもなんとなく、ぎこちない表情ながらも本当に喜んでくれてるのが伝わってくるようで、先ほどまで感じていた不安が少し和らいだ気がした。

そして導かれるままに、円形の机のそばにあるクッションのようなものの上に座らされる。・・・ふっかふかだぁ。

「食べて」

そして目の前に差し出される器。

どうやら僕のために食事を作ってくれたらしい。

「・・・きゅるるる～～」

うっ。

「ふふふ」

僕のなんとも可愛らしい腹の音にそのお姉さんが笑みをこぼした。

今度はさっきよりも自然な感じがした。

・・・それにしても僕の腹よ、なんでそんな音を出す。

出すならもっと男らしい、ぐごぉぉぉぉぉぉ！とか、ごががががぁぁぁぁぁぁ！！とかにしてくれないかな。

そんな叶わぬ願いを抱きながら同時に差し出されていた木製のスプーンを手に取る。

「・・・・」

「・・・・」

こ、ここにきて毒が入ってるとかいう落ちは・・・ないよね？

・・・うん、まぁそんなことしなくてもいくらでも僕を煮るなり焼くなりできるチャンスはあったしね。

・・・・あ、もしかして丸々と太らせてから食べる・・・とか？

じっと僕を見つめるお姉さん。

・・・ええい！ママよ！！

僕は意を決して、スプーンに器の中のシチューのようなものを掬い取る。

そしてそのままの勢いで口の中へそれをつっこむ！

「むぐ、もぐもぐもぐ・・・・・むっ！？」

「・・・」

その姿を確認したお姉さんは満足げな表情で僕を見つめる。

そしてそんな幸せそうな顔を浮かべたお姉さんに向けて僕は笑みを返し、そして・・・

「・・・ゲロまず。」

そう言葉を発し、僕は再び意識を手放した。

そして少年は2度意識を手放した（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございますです。はいm（＿＿）m

今回は挿絵は1枚ということで、まぁ、これはまたその都度加えたりしていきたいと思っています。

・・・え？なに？・・・挿絵なんて邪魔なだけなんじゃ！・・・って。

・・・ご、ごめんなさい！挿絵なんかいらねぇんじゃＹＯ！とお思いになられた方には申し訳ないのですが、挿絵表示機能をオフにすることをお勧めいたします。

もうね、まぁこの小説も半分そうなのですが、挿絵にいたっては大半が私の自己満足成分が含まれていますので、そう思われた方には本当に申し訳ないです。

こんな私ですが、これからもどうかよろしくお付き合いのほどをm（＿＿）m

登場人物紹介（カラー挿絵付き）（前書き）

か～～るい、軽い紹介ですので。

気張らずに御覧になってくださいね。

・・・って、気張って小説読む人なんていませんね。・・・アホですいません。

登場人物紹介（カラー挿絵付き）

＞ｉ２０６９８―１７２８＜

＞ｉ２０６９９―１７２８＜

・「アナ＝リアンテ」（主人公）

（種族）：ホワイトエルフ族

（年齢）：１８歳

（性別）：男

（外見的特徴）：白い肌に白銀の髪の毛を肩口まで伸ばしている。また身長が１５０ｃｍほどしかなく、顔立ちも可愛らしく女の子のような外見をしている。

（性格）：健気で頑張りや。家事全般も得意だが、優柔不断で勘違いの多い性格。今一番ほしい物は「しんちょー！」

＞ｉ２０７０５―１７２８＜

＞ｉ２０７０６―１７２８＜

・「エメ＝ランド」

（種族）：ダークエルフ族

（年齢）：２１歳
（性別）：女
（外見的特徴）：漆黒の肌に雪のようにしろ長髪をしている。身長が１８０ｃｍを伺うほど高く、バランスのとれたモデル体型。目元が多少鋭いところがあるが、それも彼女の鋭利な美しさを際立てている。
（性格）：クールな外見であまり感情を表に出さないような外見であるが、その実、感情の起伏は激しく、独占欲も強い。魔法や戦闘に関しては一流だが、その他は基本不器用である。

登場人物紹介（カラー挿絵付き）（後書き）

これからも登場人物が増え次第、自己満足成分満載のカラー挿絵付きで紹介していきたいと思います。

・・・ほんとに、ごめんね。

そして少年は2度舐められる

ーーーートントントントン

ーーーーーじゅ〜〜〜、じゅ〜〜

ーーーーーことことことこと

ーーーじゅる、ごくっ。

「うん、おいし♪」

雪原のように広がる濃厚な真っ白に輝くルー。

その中でコトコトと踊る色鮮やかな野菜たち。
ほのかにほぐれた、見るからに柔らかそうなお肉。
それらが渾然となって漂わす、魅惑の香り。
「我ながら最高のシチューができたね。」
そう、今僕はホワイトシチューを作っていたのだ。・・・ダークエルフのお姉さんの家で。

まぁ、なんでこんなことになったのかというとね・・・

～回想～

「う、う～～～ん。・・・はっ！」
僕は悪夢でも見ていたのか、嫌な汗をかきながら飛び起きた。
ぱさっ。
僕の額から何か、タオルのようなものが落ちた。
・・・あ、あれ？僕はいったい・・・

ここ・・・

見慣れない部屋。・・・いや、見覚えはある。それもかなり近い記憶だ。

「あ、そうか。」

僕は意識を取り戻すと、少し混乱気味の自分を落ち着かせ、一つ一つ気を失う前の記憶を掘り起こしていった。

イノシシに追いかけられて。

もう少しで襲われそうになった所を、今度はダークエルフのお姉さんに捕まって。

家に招待?されて。

お姉さんの料理を食べて・・・

そこで僕の記憶は終わっていた。

「そうか。」

僕はどうやらお姉さんの、あまりにも独特すぎるというか・・・毒毒過ぎる料理にあてられて意識を失ってしまったようだ。

「まさか・・・本当に毒が入ってたのかな・・・でも奇跡的に助かったとか。」

言ってみて、その僕の予想が間違ったものであると理解するまでに時間はかからなかった。

なぜなら・・・

「くぅ～～、くぅ～くぅ～～」

いつのまにかベッドに寝かされていた僕の傍らには、看病してくれていたのかダークエルフのお姉さんが可愛い寝息をたてて寝ていた。

そしてそのお姉さんの傍らには水桶がおかれていた。

どうやら僕の額に乗っていた濡れタオルは、お姉さんが用意してくれた物のようだ。

「そうだよね、わざわざ毒を盛った相手を看病するなんてことないもんね。」

僕は心の中で、そんな邪推をしてしまったことを詫びた。

僕はついそのお姉さんの顔にかかった綺麗な白髪をかきあげた。

「んっ・・・ん?・・・・・!?」

するとしばらくくすがったそうにしたお姉さんがその刺激で目を覚ました。

「・・・あっ、ごめんなさい。起こしちゃったみたい・・・でっ!?」

ばさっ！ぼふっ！！

そのお姉さんは目を覚まして、目覚めた僕を見つけやいなや僕に抱きつきベッドへと押し倒してしまった。

「・・・・／／／／／！？」

むにゅ～～むにゅむみ。

・・・そ、そのお姉さん！？

「はふぅ～～～！？うう～～～～ん！」

言葉にならない声を上げて、そのお姉さんは僕を力一杯抱きしめる。

「ふがふがふががぁ～～～！」

するとね・・・当然ね・・・・

むにむに～～、むにゅにゅ～～～

その見た目通り・・・というか見た目のボリューム＋今まで感じたこともない柔らかさ＋甘い良いにおい

をしたものが！・・・そう、その豊満な魅惑の胸が！！

僕の顔を包み込んでいたんだよ。

「ふが、ふがぁはん！（お、お姉さん！）」

「～～～～～～！！～～～！」

余程僕の目が覚めたのが嬉しかったのか、声にならない奇声ならぬ喜声をあげてより強く僕を抱きしめてきた。

すると、今度は別の感覚が僕を襲ってきた。

「ふ、ふごご（い、息が）」

息苦しい。

抱きしめる力が強められてしまったおかげで、僕の口とお姉さんの胸の間にあった僅かな隙間も埋められ、ほとんど息を吸うことができなくなっていた。

「～～～～～♪～～～～～♪♪」

・・・喜声が鼻歌に変わってきた。

そんなに喜んでくれるなんて、男として僕は・・・

「ふ、ふごほう・・・ふが（ほ、本望・・・だ）」

あまりの酸欠状態により意識が遠ざかっていく。

それ共に静かになっていく僕にようやくお姉さんは僕の異変に気がついた。

「・・・・!?」

即座に腕の拘束を外し、胸から僕の顔を引き離すお姉さん。

「・・・・ぷひゃあ!・・・・はぁ、はぁ、ぜぇ、はぁ、すぅ〜〜はぁ〜〜、はぁ・・・んく・・はぁはぁ」

なんとか意識を手放す前にお姉さんの胸の中という甘美な地獄から開放された僕は、もうそれは一生分の酸素を取り込むかのような勢いで呼吸を繰り返した。

「はぁ、はぁ・・・・すぅ〜〜はぁ〜〜〜。すぅ〜〜はぁ〜〜〜。」

ふぅ、ようやく呼吸も落ち着いてきた。

くいっ。

「?」

僕の呼吸が落ち着いてきたのを見計らうようにして、そのお姉さんは僕の顔を両手で掴み、自分の顔の方へと顔の向きを調整した。

「あっ」

そのお姉さんの顔は・・・美しかった。

いや、初めて会ったときから綺麗だなぁとは思っていたけど、間近で見るその美しさは別格だった。

その息を呑むような綺麗な顔には良く筋の涙の跡が。・・・そんな

に心配してくれてたんだ。

僕はなんだかとても嬉しいような気持ちになった。

まだ会って間もない僕に対してそこまで心配してくれるなんて、本当に優しい人なんだぁ。

そんなことを考えていると、だんだんお姉さんの顔が近付いてきた。

「・・・え？」

するとその艶かしい、つやのある唇から覚めるような鮮やかな赤色をした下を伸ばして・・・僕の顔を舐めた。

「ぺろぺろ・・ぴちゃ、ちゅむ」

「・・・え？・・・・えええええ！？」

な、なんで！？・・・そういえば、ここで初めて目が覚めたときも舐められていたような・・・

これがこのお姉さんなりの愛情表現なのだろうか。

「ちゅむ・・・うん、綺麗になった。」

「・・・あ」

・・・どうやら僕の顔を綺麗にしてくれてたらしい。

そういえば、息を止められすぎてて僕の顔、涎とか鼻水とか涙でぐ

っちゃぐちゃになっていたのを思い出した。

「・・・はぶ。・・・ん～」

そしてそんな僕の顔を今度は、傍らに準備してあった濡れタオルを軽く絞り、そのタオルで拭いてくれた。・・・あれ？これって２度手間じゃあ・・・

そうこうしている内に僕の顔を拭き終わったお姉さん。・・・ぺろり。

「・・・♪おいし。」

また舐められた。

・・・・どうやらこのお姉さんには特殊な性癖があるようだ。うん。そういうことにしておこう。

「あ、ありがとうございました。・・・ところでお姉さんはいったい・・「エメ」・・・え？」

「私の名前。」

「エメさん？」

僕は確認するようにそのお姉さんの名前を呼ぶ。

「ちがう」

「え？」

「エメ」

「エメさん」

「ちがう」

「エメ」

「エメさん」

「ちがう」

・

・・

・・・

・・・・

・・・・・5分後

「えっとぉ〜〜・・・・エメ」

「うん♪」

満面の笑みを浮かべるエメ。

はい、どうやら呼び捨てをご所望だったようです。はい。

僕個人としては年上（多分）の相手に対して、ましてや初対面に近い人にたいして呼び捨てするのは気が引けるんだけども・・・

「～～♪」

鼻歌まで歌って喜んでくれるお姉さんを見てると、「ま、いっか」っと思ってしまう自分がいることになんだか笑みがこぼれてしまう。

「くきゅるるるる～～」

僕の意思に反して鳴るお腹。

「うっ」

緊張・・・というか、少なくとも自分の身の危険がなくなったことが確かめられて、一安心したところで、自分がまだ朝から昼以降も何も食べていないことを思い出した。

するとその音に気付いたお姉さんが、「待ってました」と言わんばかりに、僕が意識を手放す原因となったスープを取り出した。

「いやいやいやいや！？」

「はい♪」

～回想終了～

まぁ、そんな訳で、その後は僕にそのスープを飲ませようとするエメをなんとか説得して、代わりに僕が台所にたって、エメと自分の食事を作っているというわけ。

幸いにして僕には家事の才能があるみたいで、加えて7年に及ぶ一人暮らしの中で料理の腕前には自信があるんだよね。

「じ～～～～～」

「・・・」

え、エメの視線が気になる。

どうやら料理に夢中になってる僕に遠慮して、エメはずっとかまってもらいたいのを我慢する子供みたいに、体をうずうずさせながら僕のことを見ていたみたい。

「ほら、エメ。おいしいシチューができたよ。」

僕はシチューを木製の器に入れて、スプーンを添え、丸いテーブルへと運んだ。

うん、これならエメも気に入ってくれるかな。・・・そういえばエメ、あの毒毒しいシチュー普通に食べてたけど大丈夫かな。

一抹の不安を抱きながらエメに座るよう促す。

するとエメは素直にクッションの上へ両脚を曲げて、両足を外側へ投げ出すように座った。・・・つまり女の子座りだね。

そのエメを右隣に見据える位置に僕もクッションの上へ胡坐をかいて座った。

そして両手のひらを合わせる。

「??」

それを見てエメは不思議そうな顔をする。

「??あれ?エメは知らないの?食べる前はちゃんとこうして、食べるものを恵んでくれた自然に感謝するんだよ。」

エメは僕の見よう見まねで両手のひらを合わせた。

・・・う~ん、エルフ族の中ではどこでもやってるって母さん言ってたけど、やっぱり違うエルフ族だと習慣も違うのかな。

そんなことを考えながら次のステップへ進む。

「そした次は手をこのままで“いただきます”って言うんだよ。」

「いただきます?」

「そうそう。それじゃ・・・いただきます。」

「お・・・いただきます。」

僕の言葉にエメもあわてて続いた。

そして僕は、エメの食べる様子を伺う。・・・やっぱり作り手としては、食べてもらう人の感想とか顔色がどうしても気になるものなんだよね。

エメはゆっくりとした動作でシチューを掬い、それを口へと運んでいく。

「あ〜〜、んむ。・・・んぐ、もぐもぐもぐ・・・／／／／！？」

しばらく咀嚼した後、嚥下。

そのままスプーンを口の前に出した状態で固まり、黙り込むエメ。

「・・・あ、あれ？口に合わなかった？」

・・・どうしよう。やっぱりエメと僕とでは味の感じ方に違いがあったのかな。

せっかくエメを喜ばせてあげようと思って作ったのに、これじゃただのおせっかいじゃないか。

僕はどんどん勝手に落ち込んでいく。

再度エメの様子を伺う。

>i20851—1728<

「・・・？」

あれ？なんかさっき見たときより頬が赤くなってるような。・・・心なしか目元も潤んでる気がする。

・・・怒りたくなるほど、泣きたくなるほどまずかったのかな。

「・・・はぁ」

ついため息が出てしまう僕。

・・・僕が2回目のため息をつこうとしたとき、今まで固まっていたエメが再び動き始めた。

「はぐ！むぐぐぐむぐむぐ、ごく。はぐ！！もぐむぐむぐむぐ、ごく！！」

目にもとまらぬ速さとはまさにこのこと。

そうエメはフリーズが解けたみたいに木製の器を左手でしっかりおさえると、スプーンを高速で動かしシチューをあっという間にたいらげていく。

・・・エメのスプーンが5つぐらいに見える。

その速さに最初は驚いていたが、どうやら僕の料理を気に入ってくれたようで、僕は自分のシチューに手をつけるのも忘れてその姿を眺めていた。

時折、「おかわり！」と子供のように皿を頭上にあげておかわりを催促するエメに、自然と笑みが出る。

「はいはい、ちょっと待っててね。」

ふふ、こんな気持ち・・・久しぶりだなぁ。

誰かに喜んでもらえる、誰かに心配してもらえる、・・・誰かと感情を交し合う。

それがこんなにも素敵なことだったなんて。僕はエメの給仕をしながら、まだ母さんと父さんがいた頃のことを思い出していた。

「・・・・ごくっ！・・・・ふぅ。」

いくらか多めに作っておいたシチューを全てたいらげ、最後の一口を飲み込み満足げに息をつくエメ。

「エメ。食べ終わったら、またさっきみたいに両手を合わせて“ごちそうさまでした”って言うんだよ」

すると今度は僕が両手を合わせなくても、自分で両手を合わせて「ごちそうさまでした！」と満足げな声と表情で言った。

・・・うっ、その表情に思わず僕は胸が高鳴るのを覚えた。

だ、だってしょうがないじゃないか！可愛いものは可愛いんだから！！

そうまだエメと出会って1日も経っていないけど、もう最初の頃の不思議で鋭利な感じのする雰囲気は感じなくなっていた。

エメは外見だけ見れば“綺麗”という言葉がふさわしいんだろうけど、今の僕にとってのエメは“可愛い”の方があってる気がした。

そんなエメを横目に僕はすっかり冷めてしまったシチューを食べるためスプーンを手に取った。

「・・・」

「じ〜〜〜」

「・・・・・」

「じ〜〜〜〜じ〜〜〜〜〜」

・・・な、なんか見られてるよ！

食べ終わって満足げな表情を浮かべていたはずのエメは、僕がシチューを食べようとスプーンを手に取ると僕の方をじっと見つめてきた。

・・・も、もしかして、あれだけ食べてまだ足りないのかな？

少なくとも5人前以上は食べてたはずだけど。

僕はもう空きすぎて鳴くことすらなくなったお腹を気にしながらも、やっぱりエメの笑顔を見たいがために自分のシチューを差し出すことを決意した。

「・・・いいよ。」

僕はそう簡潔に言うと、自然と赤くなっていた顔を隠すようにして器を差し出した。

「・・・いいの！？」

案の定元気よくうなずくエメ。・・・・うう～、もうその笑顔に勝てる気がしないです。

するとエメは体ごとコチラへ向けて、座ったままじりじりと僕の方へ近付いてきた。

「はい、これ僕の分のシチュー。遠慮せずに食べ・・・「ぺろり♪」ひぇっ！？」

＞i20849|1728＜

僕がシチューを差し出した直後、僕とエメの顔の間の距離がゼロとなり、エメは・・・その・・・な、舐めました。僕の顔を・・・・舐められました。僕の・・・顔が。

「え。えええええ!?」

「シチューより・・・・おいし♪」

その時のエメの顔は・・・まるで獲物を前にした肉食獣のそれであった。

＞i20850|1728＜

あ・・・あれ？

やっぱり僕って・・・・・・・・・・・た、食べられちゃうの？

忘れ・・・というかすっかり危機がさったと思い込んでいた僕に、
暗澹たる不安が鎌首をもたげてきたのであった。

・・・・ね、ねぇ！・・・・このまま終わらせないでよ！・・・・・え、
僕これから・・・・・どうなっちゃうんだよぉおおーー！！？？

そして少年は2度舐められる（後書き）

毎度ここまで読んでくださって本当にありがとうございます。

今回は５０００字以上と長くなってしまいました。

一応一話２０００~３０００字に抑えようとしているのですが、私の１０指が・・・暴走しちゃいました。

こんな私ではありますが、これからもどうぞよろしくお願いいたします。

そして少年は別れる（前書き）

今回は申し訳ながら挿絵はなしです。（＞０＜）

・・・え？そんなの期待してねぇし？・・・そ、そうですよね～、こんなの私の自己満足ですからねぇ・・・（；・ω・、）

・・・っとまぁ、勝手に落ち込む私のことなんか気にせずに、本編お楽しみください（＾ω＾）

そして少年は別れる

「ぺろぺろぺろ」

「うう〜〜」

「ぴちゃぴちゃぴちゃ」

「う、うにゃあ〜〜〜」

「かみかみかみ」

「ひっ、ひゃう」

僕は・・・・食べられていた。

最初、僕に寄り添うような形で僕の顔を舐めていたエメは、それでは満足できなくなったのか、僕を床に押し倒し、その上にエメは覆いかぶさってきた。

そして、顔中をなめなめ、耳をかみかみ、瞼にちゅっちゅ。

それらの行動を行うたびに上気していくエメ。

鼻息も荒くなり、目はトロンとし、鋭い眼光が僕を貫く。
その姿はまるで、子供が大好きな飴玉をゆっくり、ねっとり味わおうとしている姿に似ていた。

「ひえ〜〜〜〜」

ううっ、きっと僕は、さっき僕が料理したイノシシのようにこの後、鍋にいれられてコトコト煮られるんだ。
そして今のこのエメの行動は、きっと料理している途中にしてしまうつまみ食いみたいなものなのかな。

・・・僕もしちゃってたし。

・・・あ！そっか、このつまみ食いで僕のことを不味いって思ってもらえれば助かるか・・・

「・・・おいし♪」

・・・無理でしたーーーー！

さらに激しく僕の顔中を舐めまわるエメ。

まぁね、分かってたよ。さっきもおいしいって言ってたし。・・・・いいじゃん、ちょっとぐらい希望を持たせてくれてもさぁ。

・・・わずか1秒で壊れるような希望だったけど（，・ω・、）

「んく、ひゃっ、やめ・・・んきゃう！」

僕が奇声を上げるたびに笑顔になるエメ。

ううっ、そういえば獲物を絞めるときに上げる断末魔の声に快感を覚える人もいるって聞くけど・・・まさかエメまで。

恐怖に僕はどんどんマイナス思考が働いている。

「・・・ふぁ、ふぁ～～う。」

一瞬エメの動きが止まった。

するとエメは急に大きな口を開けた。

「え！？」

ま、まさかこのまま生で！？

僕は恐怖に体が震え、目からは涙がこぼれる。

その間も大きな口を開けたエメは僕の方に近付いてくる。

「ひゃっ！助けて！！」

咄嗟に目を閉じる僕。そして・・・

・・・・何も起こらない。・・・・・・え？

僕の上には、僕を食べようと近付いてきたエメの体が密着している感覚があった。

・・・こんな時でさえ、エメのやわらかくも引き締まった体の感触に頬が上気する自分がなんだかおかしく思えたが、その感覚が今も続いていた。

あれ・・・僕、まだ生きてる？

僕は状況を確認するために瞬間、閉じてしまっていた瞼を開けた。

そこには・・・

「くぅ〜〜、くぅ〜〜、くぅ〜〜〜」

僕に覆いかぶさったまま眠るエメの姿があった。

「え、えっと・・・・？」

う〜〜ん、これは・・・どういうこと？

僕はそのままの状態で数分、信じられない目の前の状況に呆然としていた。

「・・・はっ！と、とりあえず、これって逃げるチャンス・・・だよね。」

僕は飛んでいた意識を取り戻し、とりあえず現況からの脱出を図ろうと思った。

「んしょっと。」

ぷに。

「うっ」

僕はエメを自分の体の上からどけようと、その・・・・豊満な胸に手をついた。

すると当然僕は、その・・・エメの胸をつかんじゃうわけで・・・・・・うう〜、これはわざとじゃないわざとじゃないんだ。

べ、別に僕がスケベなわけじゃなくて、これは仕方のないことで・・・

この状況になっても誰に向けたわけでもない言い訳をつぶやく僕。

頬が熱くなる。・・・息も少し荒くなってる気がする。

だ、だって・・・母さん以外の女の人と今まで出会ったことのない僕にとってはもう未知の体験だった。

それもこれほどの美人である。

いくら自分の捕食者だからといって、やっぱり僕も男。・・・そんなの、反応だってしちゃうよ！

僕はできるだけ意識しないように、でもエメを起こさないように細心の注意を払って、１０分くらいかけてエメの下から脱出することができた。

「はぁはぁ、よしっ！」

僕は早速、この家から出て行こうとすると。

「・・・アナ。」

「ひっ！？」

声を掛けられた。・・・も、もしかして、起こしちゃった？

僕は恐る恐るエメの眠っている方向へと首を曲げた。

「・・・んにゃ、・・・おいし～」

そこには、まだ僕を舐めている夢を見ているのだろうか、そんなことをつぶやきながら幸せそうな顔をして眠るエメの姿があった。

「ふぅ～、なんだ寝言か。」

僕はほっと息をついた。

「・・・」

「んふふ～～。」

幸せそうに眠るエメは・・・その・・・・・可愛かった。

少しの間、僕はエメにみとれてしまっていた。

「・・・・って、いやいやいやいや、何やってるんだ僕！ああ見えてもエメは僕を食べようとしたんじゃないか！」

そ、そうだよ。可愛い子犬だって、その実怒れば肉を食いちぎる凶暴な犬へと変貌を遂げる。

見た目に騙されちゃだめだ！

「あ～～な～～～～♪」

「・・・・」

そして僕はエメの家を後にした。・・・・・エメに布団をかけてね。

・・・だ、だって風引いたら可哀想だし。

こ、これは、たとえ敵であってもやっぱりしてあげなくちゃ男じゃないし・・・うう〜

「はぁ、こういうところが甘いのかなぁ僕って。」

そしてエメの家の前へと出てくる。

「・・・う〜、やっぱり全然知らない所だ。」

周りは森に囲まれていた。

どうやらエメの家はその森の中にぽつんと空いた、空き地のような場所に建てられていたらしい。

そして辺りにはエメの家以外は一つも人が住んでいそうな建物が一つもなかった。

「エメも僕と同じでずっと一人だったのかな。」

そういえばダークエルフ族もホワイトエルフ族と同じ様に数が少ないって母さんが言ってた気がする。

・・・なんでだったかはちょっと忘れちゃったけど。

「・・・」

少し僕と同じような仲間がいたんだという思いがこみ上げてきて、その場を離れることに戸惑いが出てきた。

それでも僕は足を踏み出した。・・・生きるために。・・・そう僕には生きる目的があるんだ。

「・・・いつか父さんと母さんに出会うまでは」

そして僕は見知らぬ森へと足を踏み出した。

そして少年は別れる（後書き）

ここまで読んでくださって本当にありがとうございます。m（＿）m

もう本当に嬉しい！の一言です。

そして今回はあまり話しも進まず、いちゃラブ的な要素も少なくてすみませんでした。

次回は新キャラ登場予定です！

・・・そしてタグに「女装」や「男の娘」などが入っているのにそういった内容が入ってなかったので、そういったタグもそろそろ回収していこうかなと思っています。

これからもよろしくお願いいたします。

そして少年は攫われる（前書き）

・・・突然ですが、絵柄が多少変わりました。

申し訳ないのですが、絵柄が不安定なためこの先もそういうことがあると思いますが、そこは文章の描写を重視してくださいますよう、ご了承願います。m（＿＿）m

そして少年は攫われる

＜所変わって、ここはエメの住む家から数キロ離れた森の中＞

タンッ

森の中を一つの影が疾走する。

タンッタンッ

木々の枝から枝へと、まるで地面を走るかのような滑らかさと、地を這う生物では及ばぬ速さでその影は移動する。

「・・・？？」

タタン

するとその影はある大きな木の枝に飛び移った所で動きを止めた。

＞i２１７６７―１７２８＜

「すんすん・・・イ〜〜〜〜イ匂いがしますの。」

一言そう口漏らすと、その影は再び森の中へと姿を消した。

ーーー

そう僕たちエルフ族の特徴の一つとして、自然との対話能力があげられる。

僕たちエルフ族はこの能力を使い、自然・・・つまり、木々や草花、動物たちと会話することができる。

・・・っと言っても、この能力には個人差もあり、木々としか会話できなかったり、逆に蟻のような小さな生物とも会話できるエルフもいるという。

そして僕の場合は専ら植物専門で、僕の暮らしていたビリアの湖周辺の森に生息する植物とはほとんどと友達になったんだよ。・・・すごいでしょ。

そう実は木々たちにも、その生息する場所によって性格が様々であるのだけど、木々たちは基本穏やかな性格のものたちが多く、よく迷子になっていた時は木々に道を聞くのは日常茶飯事であった。

「（森の木々さん、初めまして僕の名前はアナといいます。・・・実は僕、迷子になってしまいまして、道を教えて欲しいのですが・・・）」

なので僕は、いつもしている通りに意識を森の木々たちへと向けて、声音に僕の意思を乗せ、木々たちへと語りかけた。・・・しかし。

「（・・・・あ、あれ？）」

応答がない。

おかしい。

確かに木々の中には気性の荒い者たちもいるのだけど、無視をされるということは今までなかったのに。

それに僕の意思を乗せた声は、今までの経験上、僕の半径１０ｍの範囲にまでは確実に届いていたはず。

つまり僕は同時に数十本の木々に語りかけている、その数十本全てが無視をするというのは、やっぱり何かおかしい。

「（・・・あ、あのーー！木々さん？・・・聞こえてますかーーー！！）」

木々「・・・・・」

「うっ。」

え、なんで。

このままじゃ、家への帰り道が分かんないよぅ！

「う～ん、もしかして・・・眠ってるのかな？・・・眠った木なんて見たことないけど。」

まぁものは試しに、たたいてみたら起きるかな？

僕はそう考えると、おもむろに目の前にある木を叩いてみることにした。

とんとんとんとんっ！

「ねぇ！起きてますかぁーーー！・・・道をーー！教えて欲しいんですがーーーー！！」

木々「・・・・・」

・・・んにゃろ～。もたもたしてたらエメが目を覚ましちゃうよ。

僕はそんな焦りもあってか、森の番人、森の精霊と謳われることもあるエルフ族にしては少々乱暴な手段に出た。

げしっげしっげしっ！

「おらぁ！返事！・・・せめて返事だけでも！」

そう、僕は目の前の木を力一杯足蹴にしていた。・・・まぁ、木にとってはこの程度の蹴りは蚊にさされた程度らしいんだけどね。

「はぁはぁはぁはぁ。」

・・・反応なし。

くそう！

「もう一回！」

未だに反応を示してくれない木に対して、半ば八つ当たり気味に再び蹴りを繰り出そうとした瞬間。

ーーーガサガサガサガサァァーーーー！！

ウォーーーーン！

「うわっ！？」

木が唸った。

葉をこすれ合わせ、その身のうちから大気を震わすほどの唸りを上げた。

「え？・・・ええ？」

そしてそこから読み取れる木々の感情は・・・怒り。

つまりそれが示す真実はひとーつ！

・・・怒られちった。

どうやらこの辺り一帯を構成する木々たちは気難しい性格の木々ば

かりだそうで。

怒られたのなんてほんと、久しぶりだなぁ。

「・・・うん、もう仕方がない。自力で帰るしかないのかなぁ。」

僕は半ば気を落としながら、再び森の中へと足を踏み入れた。

すると・・・

ガサガサガサッ

「??」

僕の前方2mに位置する木の上から葉が擦れる音がした。

もしかして、まだ怒ってるの?

僕はそう思いながらも、ここを抜ければ問題ないと思い、そのまま歩みを進めようとした。

??「ここらへんから良い匂いがしてたですの〜」

シュタッ。

すると木の枝の上から何者かが現れ、僕の行く道を塞いだ。

・・・え、え〜と。

「ど、どちら様ですか？」

僕はしばし混乱する頭を落ち着けて、その木の上から降ってきた人物をよく観察してみた。

女の子だ・・・それもまたしても僕より背が高い。

エメほどではないにしろ、１７０近くはある身長に、スラリとしたモデル体型。

顔は整った可愛らしい顔立ちに少し鋭さの残る目元が合わさって、まるで猫科の動物を彷彿とさせるようであった。

そして髪の毛はうっすらとピンクに染まる、桜色と表現したほうが正しいように思われる淡い色合いの長髪。

その髪型は頭の両サイドで髪をまとめた、いわゆるツインテールにしている。

そしてその頭頂部には・・・三角形の形をした耳が、時折ぴくぴくっと可愛らしく動いていた。

良く見ると、お尻の方には狼のような見るからにふさふさしてそうな尻尾もついていた。

＞ｉ２１７６９―１７２８＜

なるほど、獣人族の人か。

そんな感じで見かけからの情報収集をしていると、いつの間にかその美少女は僕の目の前にまで移動していた。

??「・・・すんすん。わぁ、君からも良い匂いがするですの。」

そして、その身長差を生かして僕の頭上から（・・・ち、ちくしょう！）僕の匂いを嗅いでいた。

「あ、あの〜〜。」

??「あ、ごめんごめんです。私は獣人族のクロエっていいますの。よろしくですの！」

すると、ようやく僕の声が届いたのか腰を９０度に曲げて、ツインテールを豪快に振り回しながら元気に自己紹介をしてくれた。

「あ、あの、そんなご丁寧にどうも。・・・あ、僕はホワイトエルフ族のアナっていいます。よろしくお願いします。」

それに吊られて僕も慌てて丁寧に挨拶をする。・・・うん、挨拶は大事だもんね。

そしてお互いに頭を上げて、再び互いを見詰め合う。

・・・うっ、か、かわいい。自然と自分の頬が上気していくのが分かる。

いや最初に見たときに思ったけど、間近で見るとほんとに可愛い。

加えて、彼女はヒラヒラがたくさんついた、今まで見たこともないような服を着ていたのだが、その服もまた彼女の可愛さを引き立てていた。

「ねぇ。」

わぁ、しっぽがふりふりしてるのもかわいい～

「ねぇですの。」

もふもふしてそう・・・さわりたいなぁ

「ねぇったらねぇですの！」

もふもふ～～

「・・・・・」

「・・・・ふぎゅ！？」

・・・あ、あれ。なんか急に目の前が真っ暗になっちゃったよ？

そ・・それに。顔を前に押し出そうとすると。

・・・・ぷにゅ。

や、やわらかい。・・・それになんだか良い匂いがする。

・・・そういえば、なんかすごい最近、同じ様な経験をしたことがあるような・・・

「・・・う～～ん、本当に良い匂いですのぅ～～♪だきだき。」

「・・・はっ!?やっ、え!?」

ぼ、僕もしかしてクロエさんに抱きつかれてる!?

・・・や、やばい。意識し始めたら急に恥ずかしくなってきたよ～。

「・・・ふぅ。アナちゃん。やっと私の声が聞こえるようになったですの?」

そして、僕がクロエさんの腕の中でうろたえていると、上からそんなクロエさんお声が降ってきた。

僕はそのクロエさんの声を聞いて、この嬉しくも恥ずかしい状態から逃れるために一生懸命首を縦に降った。

「ふふっ、そうですか、それはよかったですの。」

するとクロエさんは名残惜しそうに僕の拘束を解いた。

「あっ、あの、それで僕に何か御用ですか?」

「じ～～～～～～」

「あ、あの～」

そして僕はクロエさんに質問をしたのだけれど、クロエさんは僕と目線を合わせるようにかがんで、じっと僕のことを頭の先から足先まで目線を往復させて観察していた。

そしてじっくり数分は経過してからおもむろに

「きゃ、きゃわいいですの。」

「へ？」

そんな言葉をもらすクロエさん。

「かわいいですの！きゃわいいんですの！激かわですの！！」

急にテンションの上がるクロエさん。

「最初はすごく良い匂いがしてそっちにばかり気をとられていましたが、アナちゃん。めっさ可愛いじゃないですの！」

「い、いや。あの・・・」

そう言われてもすごく嬉しくないんですけど。

「もう抱きしめて、愛でて愛でて、愛で倒したいですの！！」

そういいながら、両腕をがばっと広げて捕獲体勢に移るクロエさん。

「ちょっ！？・・・うぷっ！？」

そして捕まる僕。・・・ううっ、神様、今日僕は何か悪いことをしましたでしょうか？

クロエさんは僕に抱きつきながら、僕の首元に顔をうずめた。

＞i21766—1728＜

「すんすん。はぁ～～、これがアナちゃん自身の匂いでありますのね。・・・はうわぁ～、こちらはこちらですごく甘くて、病み付きになりそうですの・・・・はっ！？」

そして匂いの感想を述べると、何かに気付いたかのように顔を上げるクロエさん。

「束のことをお聞きしますが、アナちゃんはお料理が得意でありますの？」

「えっ、あっ、はい。・・・割と。」

「も、もしかして、この辺りから匂うシチューの香りは・・・もし

かしてアナちゃんが作った料理の匂いでありますの？」

「は、はい。多分。」

「・・・・／／／／／／」

・・・そう答えると、クロエさんの顔が急激に赤くなっていき、目が潤みはじめていた。

そしてコチラを熱い眼差しで見下ろしていたクロエさんは小さくこう呟いた。

「理想ですの。」

「へっ？」

「理想の相手ですの！」

「え？」

「お料理が上手で！こんなに可愛くて！！良い匂いがして！抱き心地がやわらかくて！！・・・もう！もう！もう！！」

・・・えっと、もしかして僕・・・やばい？

「お持ち帰りです。」

言うが早いかクロエさんは、その細い腕で軽々僕を小脇に抱えこんだ。

さすが全種族の中でもトップクラスを誇る獣人族。・・・決して僕が小さいからこんな軽々しく持ち上げられた訳じゃないんだからね！

「・・・あ、あのこれからどうなるんですか？」

「ご安心ください♪これから私たちの愛の巣への逃避行が始まるだけですのよ♪」

「・・・へっ？」

「いざ鎌倉へ！」

「・・・え？えええええええええええ！？」

そして僕は・・・2度目の人攫いを経験するのであった。

・・・・ねぇ、神様（作者）。

・・・・・・僕に怨みでもあるの？

そして少年は攫われる（後書き）

ここまで読んでくださって誠にありがとうございます！

毎回作者は大感謝しております！！そして・・・

タグ回収失敗しました！すみません！（＞０＜）

新キャラ登場でついつい文章を割いてしまって、タグ回収の部分が後半へとずれこんでしまいました。

なので、次回はバッチシやっちゃろうと思います！

※クロエの口調を「～ですの」に統一しました。

そして少年は少女となる？～前編～（前書き）

ちょっと、またもや暴走してしまい、前編・後編構成となってしまいましたが、どうぞごゆっくりお楽しみくださいませ。

※シーンの都合上、挿絵は後編のみとなっています。

そして少年は少女となる？～前編～

タンッタンッ

「～～～♪～～～♪」

はい、アナです。

「～♪～～♪」

現在捕らわれの身です。

「あの～～～」

「るん～～～♪」

はぁ、だめだこりゃ。

さっきから何度も呼びかけているんだけど、クロエは答えてくれない。

・・・というか、ご機嫌に鼻歌を謳っていて周りが見えていないの

かな。

あれだ、楽しいことをしていると周りが見えていないみたいな感じで。

そんな感じでクロエは、右腕に僕を抱えながら木々の上をまるで忍者のようにすいすい進んでいく。

はぁ・・・今僕はどの辺りにいるんだろ？

もうエメの家から離れて１０分くらいは経つだろうか？

この速さなら距離にしたら２０キロぐらいは進んでそうだ。

改めて獣人族のすごさを実感するよ。・・・よく見ると尻尾で上手くバランスも取ってるみたい。

そんな感じで、話を聞いてもらえない、身動きも取れない僕はどうでもいいことをひたすら考えるしかなくなっていて、そう思考することにも飽きてくる頃だった。

「到着！ですの。」

クロエさんが最後に盛大にジャンプすると、ある洞穴の前へと着地した。

それは、山にならどこにでもある普通の洞穴で、高さ２ｍ幅３ｍほどの大きさでした。

そしてクロエさんはそのまま僕を抱えたままその洞穴の中へと入っ

ていった。

・・・こ、ここがクロエさんのお家なのかな？

「うわぁ～」

そこは・・・見事なまでに住処と化していた。

入り口の何の変哲もない洞穴の印象はそこにはなく、洞穴の奥にはタンスや机、本棚にレンガ造りのキッチンまであった。

さらにベッドには見るからにふっかふかしてそうな布団が敷かれており、そこに横になろうものならすぐにでも至福の眠りへといざなってくれそうな感じがした。

「ういしょっと。」

「うわっ」

ぽふっ。

そして僕は、クロエさんにそのベッドの上へとぽいっと放られた。・・・な、なんか雑じゃないですか？

ベッドの上で少し恨めしそうな目線を送っている僕なんて目にも留

めず、クロエさんは洞窟のさらに奥へと消えていった。

「・・・い、今のうちに。」

逃げよう・・・と思ったのだが、すぐに思いとどまった。

実はこの洞窟、この部屋・・・というか生活空間にたどり着くまでに何度か分かれ道を通ってきており、この洞窟をよく知るものでない限り、ここにたどり着くことも、ここから出ることもできないようなつくりになっていたのだ。

「・・・ま、まぁ、悪そうな人にも見えなかったし、今はおとなしくするしかないのか。」

はぁ、なんか本当に今日の僕の運勢はどうなってるんだろ。

「ア～ナちゃん♪それじゃあお着替えしよましょうですの♪」

そんなことを考えていると、クロエさんは自分が着ているようなヒラヒラがたくさん付いた服を手に抱えて戻ってきた。

「え？お着替え？」

「そ～ですの～。だってアナちゃん、そんなに可愛いのに、そんな男の子みたいな格好して。もったいないですの。・・・ほら、ですの♪」

そういうとクロエさんは、両手で僕のために選んで来たのであろう服を広げた。

・・・フリフリやリボンがたくさなるなぁ。きっと女の子が着たら可愛くなるんだろうなぁ。

・・・女の子？

「あ、あの、クロエさん？」

「もう～、私のことはクロエお姉ちゃん♪って呼んでほしいですの。」

・・・な、なしてお姉ちゃん？

「いや、クロエさん。」

「・・・」

無表情になるクロエさん。

「く、クロエ・・・さん？」

目線が鋭くなる。

「クロエさ・・・クロエお姉ちゃん」

「な～に、アナちゃん♪ですの。」

負けました。・・・だ、だって、美少女のあんな無表情・・・怖すぎるよ。

「その、なんで僕をここに連れて来たのか？とか、なんでお姉ちゃんって呼ばなきゃいけないのか？とかいろいろ聞きたいことはあるんだけど、その根本的に正しておかなくちゃいけないことがあってね。」

「ふむふむ」

「そのね・・・」

「うん？」

・・・あ、首をかしげたクロエお姉ちゃん可愛い・・・ってそうじゃなくて！

「僕ね・・・」

「うん」

「男・・・だよ。」

「・・・・・・・・・・・・・・え？」

ひゅ～～～。

しらける空気。

「いや、だから、僕はお・と・こ！雄！正真正銘の羊を襲っちゃう狼の方なんだよ！！」

「・・・・」

僕は、誤解を生まぬよう単刀直入に、歯に衣着せぬ言葉をクロエお姉ちゃんに向けて発した。

・・・ど、どうしよう。クロエお姉ちゃん、黙りこんじゃったよ。

こ、これってもしかして、クロエお姉ちゃん怒っちゃった？

いや、考えすぎだ僕。こんな、こんな事実を言っただけで怒るなんてそんなこと・・・・

うう、考えれば考えるほど不安は不安を呼んでいく。

がばっ！

「ＯＨ！？」

すると突然クロエお姉ちゃんはベッドの上にいる僕を押し倒して来た。・・・どうしてこう僕は、女の子に押し倒されちゃうかなぁ。

男としての自信をなくすよ。

「本当に、本当に、ほんっと～～～～に！男の子ですの！？」

「う、うん。」

「・・・・・カァ～～～／／／／／／／／／／／」

な、なんだか息が荒いんですけど。

「ＯＨ，ＧＯＤ！センキュー！ですの！！・・・こんな、こんな可愛くて、料理ができて、その上・・・お、男の娘を私に恵んでくださるなんて！」

・・・な、なんだかオトコノコの漢字がおかしいんですけど。

「はぁはぁはぁ、それじゃあお姉さんがお着替えさせてあげるですの。」

め、目が怖いよ～～

「クロエお姉ちゃん、あ、あの、自分で着替えられますから。」

「遠慮しなくていいですの♪ほれほれ～～～♪」

ぽいぽい～～～っ！

「へっ」

僕は自分の体を見下ろした。

「／／／／／／／／／／」

なっ、いっ、いつの間に裸に！？

「ふふふふっ、秘儀！目にも留まらぬスッポンポン！・・・・ですの。」

「、＊＞｝＊Ｐ＋、｛＋＊｝＊＋！？」

恥ずかしさの余り声にならない悲鳴を上げる僕。

「うわぁ～～、本当に男の子ですの。・・・かっ、可愛い～～ですの。」

クロエお姉ちゃんはそういいながら僕の体の中で唯一最も男らしい部分を凝視していた・・・って

「わわっ！？だめ！見ちゃダメなの～～～～！！」

僕は慌てて両手でその部分を隠したのだが、すでに遅し。

「白くて、先に少しピンク色があって・・・はっ、初めて見ましたけど、予想していたのと全然違いますの。」

・・・うう～～、しっかり記憶されたよ～～。

「・・・さぁさぁ、いつまでも裸だと風邪を引きますの。早くお着替えしましょうね～～～、ですの。」

少しの間うっとりとした表情を浮かべていたクロエお姉ちゃんは、本来の目的を思い出し僕の方へじりじり迫ってきた。

「いっ、いや大丈夫だよ。ほら、ここ全然寒くも暑くもないし！」

そう、この洞窟は適度に外から入ってくる風や、おそらく地熱のようなものの働きのおかげか、室温が快適な温度に保たれていたのであった。

「・・・はぁ～～、いいですの。嫌がる男の子を無理やり着替えさせることができる日が来るなんて！」

・・・だ、ダメみたい。既になんか目的が違うし。

「さぁさぁ！」

そして僕は・・・

この日、男として大切なものを一気に無くしたのであった。

そして少年は少女となる？～前編～（後書き）

前編終了です！・・・よろしければ後編もどうぞ！

後編は挿絵もあるよ（＾ω＾）

そして少年は少女となる？～後編～（前書き）

暴走モード！！

そして少年は少女となる？～後編～

「うっうっ、ぐすっ。」

涙ぐむ僕。その傍らでは

「はぁ～～～～～」

満足げな表情を浮かべるクロエお姉ちゃん。・・・まるで陰と陽が同居してるみたいだ。

手短に何があったのかというと、着替えという免罪符を振りかざし、お尻をなでなで、お胸をむにむに、息子をさわさわ・・・・そして・・・

「うっ、僕のファーストキスがぁ～～～！」

そう、僕はこの日まで大切に守っていた唇を・・・奪われてしまったのだ。

「本当においしかったですのぅ～～」

「うう～～～、初めてだったのに！しっ、舌まで入れて！！」

その初めてだったから良くわかんないけど、なんかすっごく慣れてるみたいだったよ。

「ふふふっ、大丈夫ですの！私も男の子とするのは初めてですの！！一緒ですの～♪」

・・・そ、それって女の子とはやってるってこと！？

はぁ～、なんか終始クロエお姉ちゃんのペースだよ。

「・・・それにしても。」

「？」

「・・・・・かっ、可愛すぎですの！」

「／／／／」

＞i21796―1728＜

そっ、そうだった！？

そう、今の僕はクロエお姉ちゃんと同じ様な服を着せられていたのだった。

フリフリとリボンがそこかしこに装飾され、肩部分が少し膨らんでいるような服。・・・もちろんスカートだし。

「クロエお姉ちゃん！恥ずかしいよ～～。僕の服帰して！」

「ダメですの！可愛い子は可愛い服を着るのは義務ですの！！・・・・それにもうアナちゃんの服はないですの。」

「え？」

「私の秘儀！目にも留まらぬスッポンポン！！は服を脱がすのではなくて、目にも留まらぬ速さで相手の服を目で見ることのできないほど細かく切り刻む技なんですの！」

・・・そっ、そっかぁ～。てっきりどっかに飛んでいってなくなったと思ったら、本当になくなってたんだぁ～～、ふ～～～～ん。・・・

「えええ！？そんなぁ！！」

それじゃあ、僕は自分の家に帰るまでこんな服を着てなきゃいけないの！？

「きゃわいいきゃわいいですの♪」

「わぷっ！？」

もう今日何度目か分からない抱擁。・・・うぅぅ、男の性がこれをやられると逆らえないよ～。

・・・くきゅるるるｒ～～

「？？」

なんだろう、今の可愛らしい音は。

「・・・お腹が空いたですの。アナちゃん、何か作って欲しいです

の。」

「そんな、なんで僕が・・・・・わ、分かったよ！作る！作りますぅ！！」

「やった♪ですの。」

ううっ、もうそんな上目遣い・・・卑怯だよ。

・・・はぁ、まぁ悪い人ではないってことはだいたい分かったし、僕も結局何も食べてないし、いっか。

僕はそんなことを考えながらも、大好きな料理ができるとあって心踊りながらキッチンへと向かおうとした。

その時・・・

するっ

「へっ？」

ぽふんっ。

・・・こけた。

僕はベッドから降りようとした際、シーツに足を掬われてそのままベッドに頭からダイブしてしまっていた。

「うう〜〜〜、かっこ悪い。」

「・・・・」

??な、なんだかすごく下半身に視線を感じる。

僕はそのままの状態で、首だけ後ろへと向けてみるとそこには・・・

「ううっ、こっ、この子！天才・・・ですの。」

鼻血を出しながら、僕のお尻を凝視する・・・変態がいた。

「ほっ、本当に男の子にあるまじきお尻ですの！こんな、白くてやわらかくて、その上この芸術的なおしりのライン！・・・そんなお尻を包み込むフリフリパンツが、もう！もう！！・・・可愛すぎですのーーー！！・・・は、鼻血がどまりまぜんのう〜〜〜」

・・・え？・・・ぱ、パンツ？

僕は、恐ろしすぎる自らの考えを払拭するために後ろへと向けていた視線を、自らの下半身へと向けた・・・そこには見えた光景は

＞i21795―1728＜

「、｛＊｝＋、＋?｝＊＋?｝＊＋?！！??」

僕の生涯に、永遠に残る傷跡を残すには十分すぎるほどの破壊力を持っていた。

そう・・・僕は、女の子用のあの小さい布切れ・・・パンツを穿かされていたのだ。

もう終わった。

「もうだめだ。・・・こんな僕なんて誰ももらってくれないよぅ～～～（ＴＯＴ）」

もう僕の人生終わりだ。終わりなんだ。ははっ。

「大丈夫ですの！」

「うっ、うぐ・・・え?」

「私がアナちゃんをもらいますの！一生添い遂げますの！！」

「くっ、クロエお姉ちゃん・・・」

精神状態がおかしくなっていた僕には、このときのクロエお姉ちゃんはまさしく地獄から僕を助けに来てくれたメシアに見えた。

「だっ、だから、やっぱり料理より先にアナちゃんをいただくですの！・・・もう、そんな誘惑されたら我慢できませんの！！」

・・・え？

がしっ！

「ひゃう！？」

そういうやいなや、クロエお姉ちゃんは僕のお尻を鷲掴みしてきた。

「ああ～～、とってもやぁらかいですの～～。すんすん、はう～～ここからも良い匂いがぁ～～」

「も、揉まないでぇ～～。ひゃうっ！？か、かがないでよ～～～」

「ぺろっ♪」

「きゃっ！？」

な、舐められた！？

「・・・い、今の声。・・・最高ですの～～。もっと、もっとその可愛い声を聞かせて欲しいですの～～。ぺろぺろ、ちゅるぅ～～～」

「ひゃうぅ～～、吸わないでぇ～～。そんなところ汚いよ～～」

「汚くないですの～～～、ちゅるぅ、んちゅ。」

うぅう〜〜、お尻が気持ち悪いよ〜。・・・そんな僕の気持ちとは裏腹に、僕の頬は上気し、息も上がってきた。

なっ、なんで？僕の体どうなってるの？

「んちゅ・・・っはぁ〜。ふふふふふ。んちゅ〜〜」

「はぁはぁはぁ・・・！？んちゅ、うむぅ〜〜」

お尻への責めが一段落付いたかと思うと、すかさず唇を奪われた。

「はむ、んちゅ、ちゅっ、んちゅ、ちゅる〜〜、れろっ、ぴちゃ。」

「んちゅ〜〜、ちゅっ、ひゃっ！？、ひっ、ひたいれないれ〜〜（し、舌いれないで〜〜）」

そう口では言いながらも、自分の体がクロエお姉ちゃんを求めるのを止められない。

なっ、なんなのこれ？怖いよ〜〜

「・・・んっちゅ、っぱぁ！はぁ、はぁ、もう〜ダメですの。・・・アナちゃんをちょうだいですの。」

「はぁ、はぁ、はぁ・・・え？」

クロエお姉ちゃんはそういうやいなや、自らの穿いていたパンツを脱ぎ始めた。

「なっ、なっ！？」

「もう我慢できないんですの～～。・・・私の初めて・・・もらってほしいですの。」

これって、まっ、まさか。

その時僕はお母さんの言葉を思い出していた。

（「いいアナ、今教えたことは本当に大好きになった相手としかしちゃいけないのよ？」「それってどのくらい好きならいいの？」「う～ん、そうねぇ。もうこの人がいなくなったら生きていけない！一生一緒にいたい！って思えるぐらいかなぁ」「じゃあ僕にとってのお母さんとお父さんだね！・・・じゃあ、僕もお母さんとするの？」「だっ、だめよ！それだけはだめ！」「え・・・じゃ、じゃあお母さんは僕のこと嫌いなの。」「ああ、いやそういうことじゃなくてね、あのね・・・」）

ふふっ、なんか昔のこと思い出したらちょっと笑っちゃうな。

もう本当に、まだ6歳ぐらいの僕に教えるんだもんねぇお母さん。・・・ってそうじゃなくて！

「ダメェェェエエ！」

僕は今にも僕と一緒になろうとしていたクロエお姉ちゃんに向かって大きな声をあげていた。

その大声にびっくりしたのか、クロエお姉ちゃんは動きを止めた。

そしてその顔は次第に悲しみの表情へと変わっていった。

「・・・アナちゃん私のこと嫌いですの？」

・・・ふふっ、これじゃあお母さんと一緒だな。

僕はそんなクロエお姉ちゃんの姿にお母さんとの思い出を思い出し、切羽詰っていた気持ちが一気に楽になっていくのを感じた。

「ううん、そうじゃないよ。」

僕はクロエお姉ちゃんの頭をなでながら、諭すように話かけた。

「でもね、こういうことは本当に大好きな人とだけするんだよ？」

「うっ、うぅ。私、アナちゃんのこと大好きですの。だいだいだいだいだ～～～い好きですの。」

ははは、なんかこういうストレートな表現も悪くないかな。やっぱりこの子はいい子だ。だったら、なおさら、もっと自分を大切にして欲しい。

「うん、僕もクロエお姉ちゃんのことは嫌いじゃないよ。・・・でもね、やっぱりもっとお互いのことを知らないといけない。もしかしたら、もっと相応しい相手が現れるかもしれないよ？」

首を目一杯横に振るクロエお姉ちゃん。

「実はね・・・僕もクロエお姉ちゃんと会ってから少ししか経って

ないけど、クロエお姉ちゃんのこと好きになっちゃったと思う。」

そう僕が言うとすぐに顔をほころばせるクロエお姉ちゃん。

ころころ表情が変わるところも可愛いなぁ。・・・まるでエメみたい。・・・あれ？なんでエメのことを・・

「・・・でもね、もしかしたらこの気持ちが一時のものであるかもしれない。もしかしたら、この先クロエお姉ちゃんより好きな人ができるかもしれない。」

「それでもいいですの！」

「ううん、違うよ。・・・僕が良くないんだ。クロエお姉ちゃんには幸せになって欲しい。クロエお姉ちゃんを悲しませたくないんだ。・・・だから、お願い。・・・もっとお互いのことを知る時間を頂戴。」

「うう～～」

「・・・・」

返答を待つ僕。

「・・・・わかったですの。・・・待つ・・・・ですの。」

「クロエお姉ちゃん。・・・んちゅ！むぅ！？」

「んちゅ、ちゅる・・・ぷはぁ。そのかわり、アナちゃんの気持ちが決まるまではずっと一緒にいるですの！もちろん、キスとか本番

以外はバンバンしていって、アナちゃんをなんとしてでも落として見せるですの！」

・・・あっ、あれ？これは・・・失敗しちゃったのか・・・な？

「っというわけで、もうワンキスですの～～～」

「ちょっ、まっ！？」

ドガーーーン！！！

「へっ？」

「なんですの！？」

突如洞窟の入り口から轟音が響いてきた。

そして入り口の方向から土煙が立ち込めてきた。

「何が起こってるんだ！？」

かつ、かつ、かつ

「足音？・・・誰か近付いてくるですの。」

そしてやがて土煙の中に人影のようなものが浮かび始めてきた。

「・・・誰ですの？」

そしてやがて、土煙がおさまって治まっていきその中から現れたのは・・・

「・・・・え、エメ？」

そして少年は少女となる？～後編～（後書き）

ここまでお読みくださり誠にありがとうございますｍ（＿＿）ｍ

今回は暴走・・・と書かせていただきましたが、もう暴走の頻度が高くなることがみえみえな感じですみません。

・・・次回はあの人が帰ってくるのか？

Ｐ．Ｓ．）投稿してから間もなくで申し訳ないのですが、更新頻度が落ちるかもしれないです。２週間に１回とか・・・できるだけ１週間に１回でやりたいとは思いますが、ちょっとプライベートが大変な時期なので、その点はご了承願いたいとおもいます。

そして少年は男になる（前書き）

お久しぶりです。

やはり最近はめっきり忙しくなり、今回の更新も予告していた期限の2週間ぎりぎりの更新になってしまいましたが、なんとか間に合いました！

それではお楽しみください！

そして少年は男になる

なっ、なんで？

ーーーーーカツ、カツ、カツ

たおやかになびく美しい銀髪。

ーーーーーカツ、カツ、カツ

闇よりも暗い漆黒の肌。

ーーーーーカツ、カツ、カツ

怒りの色が浮かんだ鋭い瞳。

その姿はまさしくエメ自身のものであった。

・・・・・って。

いやいやいやいや、エメの外見を解説してる場合じゃないって！

「どっ、どうしてここに？」

そうだよ、ちゃんとエメが寝ているのを確認してから出てきたのに。

それもクロエお姉ちゃんのスピードでかなりの距離を移動したはずなのに。

「・・・」

僕がそんなことを考えている間にも、無言で不気味な雰囲気を纏ながら着実にこちらへと近付いてくるエメ。

「ひぇぇ～～～」

やっ、やっぱり怒ってるんだ！？

どうしよどうしよどうしよ～！？

カツカツ。

「へっ？」

すると、困惑する僕の前にクロエお姉ちゃんが立ちふさがった。

「だ・か・ら」

そしてエメに向かって目にも留まらぬ速さで向かっていく。

ダッ！

勢いよく左足で地面を踏み込み、エメに向かって跳躍する。

同時に固めた拳を大きく後ろへと振りかぶる。

「誰だって・・・」

そして・・・

「聞いてますの！！」

ドゴーーーーッン！！

振り下ろされる必殺の拳。

岩をも軽々と粉砕する威力を持った拳がエメを襲った。

「わぅ～～～～～！！」

クロエお姉ちゃんの拳が生み出す衝撃波によって巻き上がる土煙が僕を襲う。

なっ、なんて怪力！？

あれじゃ、いくらダークエルフ族のエメでもただじゃすまないんじゃ。

僕は、自分が狙われていることも忘れてなぜかエメの身が心配になった。・・・なんで？

＞i22530―1728＜

「ふふん。骨も残さないです・・・・の！？」

ーーーカツ。

「え？」

舞い上がった土煙が再び治まると、そこには・・・

「・・・エメ。」

エメがいた。

それも無傷、見る限り傷らしい傷が見つからない。

少しばかりエメの着ている、両側にスリットの入ったチャイナドレスのような服が汚れている以外何も変わりのない姿がそこにあった。

「おまえが・・・」

再びエメに向かって突進するクロエお姉ちゃん。

「くっ！一発でダメなら何度でも！」

先ほどよりさらに速度をましてエメに肉薄するクロエお姉ちゃん。

「お前が・・・・・」

「何度でも叩きこんでやるですの！！」

そして・・・

「アナを盗ったのかぁあああああああああああああああああああああああああああ！！！！！」

>i22526|1728<

「きゃっ！？」

「うわぁっ！？」

あと1秒もしないうちにクロエお姉ちゃんの拳がエメに届こうかという時に、突如、エメを中心にして暴風が巻き起こった。

暴風はクロエお姉ちゃんを襲い、その身を軽々と10mも先へと吹き飛ばしてしまった。

「こっ、これは。なんて巨大な魔力なんだ。」

そう、この暴風はエメの体からあふれ出した魔力によって生じた現象なのであった。

「でっ、デタラメもいいとこですの。魔力の放出だけでこんな・・・」

本来魔力というものは、そこに「火」や「水」といった自然界に存在する四大元素に変化させて初めて役に立つ代物となるのである。

なので魔力単体では何の役にも立たない、それこそ空気のような存在でしかない。

ーーービューーー!!

しかし今目の前で起こっているのはまさしく魔力が原因で起こっている現象である。

体からあふれ出した魔力があまりに膨大すぎて、行き場を失った魔力が自然に「空気」の元素へと変化し、その流れが暴風となって僕たちを襲っているのである。

「・・・っ！」

「・・かはっ！？」

そして次の瞬間、エメの咆哮が収まったかと思うと、目の前からエメの姿が消え、いつのまにかクロエお姉ちゃんの体が壁に叩きつけられていた。

「クロエお姉ちゃん！」

僕はすぐにクロエお姉ちゃんの側に駆け寄ろうとした。

しかし・・・

「くっうぅ！？」

ーーーギュウウウ

僕が一歩も踏み出す前にエメがクロエお姉ちゃんの前へと移動し、その細い腕一本でクロエお姉ちゃんの首を持ち、体を頭上へと持ち上げていた。

>i22532_1728<

「お前がぁ！」

怖い。

・・・僕は動けなかった。

駆け寄ろうとした足が竦んだ。

膝がガクガク震えた。・・・いや、膝だけじゃない。

体全体が震え、顎が震え、上下の歯がガチガチとした音をあげ、心臓の音がうるさいぐらいに耳に響いた。

だっ、ダメだ。逃げなきゃ。

このままじゃ、僕が今度こそ食べられちゃうよ。

「ぐぅうううう！」

「あぐっ！？」

だんだん青ざめていくクロエお姉ちゃんの顔。

良くみると体中の筋肉が痙攣している。恐らく体中の筋肉が酸欠を起こしてるんだ。

このままあと数分も放って置けば確実にクロエお姉ちゃんの命は・・・ない。

・・・何を考えてるんだ僕は！

逃げる？・・・違う。

そりゃクロエお姉ちゃんと会ってから1日も経ってないけど、それでも僕はクロエお姉ちゃんのことを好きになったじゃないか。

そのクロエお姉ちゃんが僕のために命を落とそうとしてる。

そう・・・僕のために・・・・・・・僕なんかのために。

父さん、母さん。

ここで逃げ出すなんて・・・僕はもう二度と、僕のために誰かがいなくなるなんて嫌だ！

「くっ！」

僕は震える体に鞭をうって立ち上がった。

そうだ、ここで逃げちゃダメなんだ。

ここで逃げたら僕は、父さんと母さんにもう会えない気がしていた。

「そうだよ。母さんだって言ってた。女を守るのが男の役目だって。・・・こっ、怖いけど、こんなところで逃げたら、顔向けすらできないよ。」

「・・・はっ、がっ。」

「あっ！？」

もうクロエお姉ちゃんも、持ち堪えられそうにない。

「殺す！！」

そして、エメの腕にさらなる力が加えられた・・・・次の瞬間。

「うわぁぁぁ

「くっ！？なんで！」

まるで大木にでも突進したみたいな感触だった。

くそっ！なんで！？

「うぉおおおおおおおお！」

そのままいくら力をいれようともびくりともしない。

・・・そんな、僕は大切な人一人を助けることすらできないのかよ。

「やめて！やめてよ！！」

僕はエメに向かってそう叫んだ。

一時とはいえ、僕はエメに対してクロエお姉ちゃんと同じ感情を抱いていた。

そんな感情を抱かせてくれたエメがどうして。

「うっ、うっうう。」

僕は・・・・・泣いていた。

エメの腰にしがみつくようにして、顔中を涙と鼻水でぐしゃぐしゃにしながら叫んだ。

「やめて、やめてよ！！僕の声を聞いて！！・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・エメ！！！！」

「・・・！？」

ーーードサッ。

「・・・がはっ！」

「え？」

するとエメの腕の拘束が解け、クロエお姉ちゃんは地面へと倒れこんだ。

「はぁ、はぁ、はぁ」

よかった、ちゃんと生きてる。

酸欠で意識は失っているようだけど、肩を上下させながら呼吸をするのを確認して安堵する僕。

そして僕はクロエお姉ちゃんの無事を確認するとエメの顔を見上げた。

「・・・アナ。」

するとこちらを見つめていたエメと目が合った。

「エメ・・・エメが狙ってたのは僕でしょ。」

「・・・うん。」

いつの間にか、エメから先ほどまでの魔力や怒気を感じなくなっていた。

僕は覚悟を決めた。

「・・・僕を食べて。」

「いいの？」

「うん・・・僕の命、エメにあげる。・・・だからクロエお姉ちゃんだけは助けて。お願い。」

「はぁ、はぁ」

僕の声が聞こえているのか、息を荒くしながらエメは僕の両肩を掴んだ。

そして・・・

潤んだ瞳をたたえながら、妖艶な唇を僕のそれに重ねた。

＞i22531—1728＜

「んちゅう、ちゅる。」

「ひゃう、ちゅっ。」

ああ、きっとこれは僕を食べる前準備だったんだ。

そんな行動に僕はなんかときめいたり、変な期待をしてたのか。

こんな状況にも関わらず、僕はなんだか自分が情けなくなっていた。

「んちゅ〜〜〜・・・ちゅぱっ」

「ちゅぱっ！・・・はぁ、はぁ」

長いキスを終えたエメは、舌なめずりをしながらその両手を僕の体へと伸ばしてきた。

さよなら、父さん、母さん、クロエお姉ちゃん。

その時の僕は、なぜか怖いという感情よりも、大切な人を初めて守れた満足感に包まれていた。

そして少年は男になる（後書き）

ここまでお付き合いくださってありがとうございました。ｍ（＿＿）ｍ

こちらの本編の更新はこれで終了なのですが、実はこの先のいわゆる“本番”行為の場面も執筆しちゃったりしてしまいました（＾０＾）

ですがそうなると、そちらは１８禁パートになってしまいますので、別に投稿させていただいています。

なお、そちらの１８禁パートをお読みにならないでも、本編の話は繋がっていくように進めていきますので、１８歳未満の方はご心配なさらずに。

もし少しでもご興味を示された１８歳以上の方にお楽しみいただけたらと思います。

※ｈｔｔｐ：／／ｎｏｖｅｌ１８．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ６５８１ｓ／（１８禁パートＵＲＬ）

そして少年は男になる　～ｏｖｅｒ　１５　ｗｏｒｌｄ～（前書き）

こちらは、「そして少年は男になる　～ｏｖｅｒ　１８　ｗｏｒｌｄ～」の１５禁バージョンの話です。

話の内容は「そして少年は男になる　～ｏｖｅｒ　１８　ｗｏｒｌｄ～」とほぼ変わりない、１８未満の読者の方向けに修正したものとなっていますので、話自体は１８禁パートの話から進んでいませんので、その旨ご了承くださいませ。

そして少年は男になる　～ｏｖｅｒ　１５　ｗｏｒｌｄ～

僕・・・食べられました。

でも、僕は生きている。・・・・なぜ？

その答えはとても簡単。なぜなら・・・・・

僕は、“性的”に食べられたからでした！・・・・・・はうっ／／／／

～回想、始まり～

エメは、恍惚とした表情を浮かべながら、左手で僕の大切な部分を責めながら右手で自らの秘所を慰めていた。

「ふふっ、ココもうこんなに大きくなって、ピクピクしてる。・・・・エメで感じてくれてるの？嬉しい。」

なっ、なんで急にこんなことするの？

これじゃまるで・・その・・・せっ、セックスしてるみたいじゃないか！？

「ひゃっ、んぅ、どっ、どういうつもりなの？・・ひゃっ！？・・・えっ、エメは僕を・・んぅ、殺すために来たんじゃ、ひゃぅっ、ない・・の？」

僕は今まで感じたことのない感覚に意識が飛びそうになるのを堪えながら、エメに真意を聞いた。

「・・・・」

ピタッ。

「えっ？」

その質問をした途端、今まで続いていたエメの責めはピタリとやんだ。

「えっ、エメ？」

「ちがう。」

「え？」

「違う違う違う違う、チガウ！！んちゅうう〜〜〜〜〜！！」

「えっ、わぅんちゅ〜〜じゅる、ちゅう〜〜〜」

そして、少しの間黙りこんだかと思うと、次の瞬間にはいきなり激しいディープキスをやられていた。

「んぅぅぅう〜〜〜、っぷはぁ！はぁ、はぁ、はぁ。」

「はぁ、はぁ、はぁ。」

どっ、どういうこと？・・・エメは僕を獲物として捕まえたんじゃないの？

僕は訳が分からなくなり、思考が停止していた。

「エメは・・・エメはアナが好きなの。・・・大好きなの。愛してるの。」

「・・・・え。」

「えええええええええええええええええええええええ！？」

この日何度目かになるのか分からない絶叫を上げた。

「エメはアナが好き・・・だから、アナを食べるの。アナとHするの。したいの。」

えっ。

「えええええええええええええええええええ!?」

ってことは、なんなの?僕が一方的に勘違いしてただけ?

僕にキスをしてきたのも、舐めたり、匂いを嗅いだりしてたのは、食欲から来た行動じゃなくて、性欲とか好きとかそういう所からきた行動だったってことなの?

「だから、エメからアナをとったアイツ、許せなかった。絶対に許せなかった。」

「はぁ。」

急な展開に僕は生返事を返すのが精一杯だった。

「・・・でも、アナをこんなにも可愛くしてくれたのには、感謝してやらなくもない。」

・・・え。もっ、もしかして、エメもクロエお姉ちゃんと似た趣向が？

「っぷ」

「？？」

「くっ、ハハハハハハハッ！なんだぁ、そういうことだったんだぁ～。」

「アナ？」

「あっ、ごめんごめん。てっきり、僕の人生ここで終わるのかなって、ずっと覚悟してて、でも違ってて・・・そっか。」

僕は絶体絶命の危機が、実は単なる自分の勘違いであることが分かり、今まで張り詰めていた分の緊張が途切れてつい笑いがこぼれだしていた。

「ぐすっ。本当に・・・よかったぁ～～。」

そして次に涙がこぼれ出した。

はぁ、本当によかった。これでまた父さんと母さんを待てる、クロエお姉ちゃんともまた会える。

ああ、生きてるってすごく幸せなことなんだなぁ。

「ぺろっ。」

「ひゃうっ！？」

急に笑い出したと思ったら泣き出した僕に対して、エメは優しい瞳を向けながら、僕の涙を舐め取った。

ふふっ、今までは怖いとか思ってた瞳なのに、真意が分かったら、なんだこんなにも優しい瞳を僕に向けてくれてたんだ。

その瞳に見つめられていると、自然と僕の心が落ち着きを取り戻すのが分かる。

「・・・アナ、大丈夫？」

「うん、ありがとう、エメ。そして・・・ごめんね。エメのこと誤解して・・・怖いとか思ったりして。」

「ううん、いいの。・・・分かってくれたなら、いい。」

「うん、ありがとう。もう僕は大丈夫だ・・んっちゅ！？」

「ちゅう～～～～！・・・・っちゅぱぁっ！・・・じゃあ、食べる。」

「んぱぁ！・・・え？え？」

「アナ、誤解解けた。エメの気持ちも伝わった。そして、アナ言ったよ。アイツ助ける代わりに食べていいって。」

・・・そっ、そっかぁ！？“獲物として”食べられるのは免れたっていうか、元からそんなことはなかったんだけど、“好きな相手として”食べられるっていう状況は脱してなかったんだ！

「あっ、あのね？エメ。・・・今僕たちがしようとしていることはそんな軽々しくやっていいことじゃないんだよ？」

「えっ・・・アナ、エメのこと嫌いなの？」

そう言うとエメは、まるで捨てられた子犬のような表情をした。

そして僕はそんなエメを小さい子をあやすように説いた。

「ううん、僕もエメのことは好きだよ。・・・でもね、セックスっていうのは本当に大切な、一生愛せるって思う人とするものなんだよ。もし、そういう人とじゃない人としたら、きっとエメは傷ついちゃう。」

僕はエメの頭を撫でながら、僕の気持ちを伝えた。

「じゃあ、アナはエメのことそんなに好きじゃないの？」

潤んだ瞳で僕を見つめるエメ。・・・うううぅ、そんな美人がそんな表情するなんて反則だよ～。それに、エメのことを誤解している間にも、エメのことを意識してしまうことは何度かあった僕にとっては、威力絶大だよ～。

それでも僕は心を鬼にしてエメを説得した。・・・母さん見ててね。僕はちゃんと女の子を大切にする紳士なんだから。

「ううん、好きだよ。でも僕たちは会ってからまだ1日も経ってないし、もっと他に良い人が見つかるかも・・・「いや」・・・え？」

エメはまるで駄々をこねる子供のような表情で、僕の話を遮った。

「エメはアナが好きなの。会ったときに思ったの。時間なんて関係ない。アナに全部あげたい。アナの全部を奪いたい。・・・こんな気持ちになったの初めてなの。・・・・エメのこの気持ち、信じてくれないの？」

感情がこみ上げて来たのか、エメは涙を流しながらも自分の精一杯の気持ちを僕に伝えた。

・・・・がばっ！

「あっ」

負けました。

気付けば僕はエメをその両腕に抱きしめていた。

ああ、そうさ！こんなに綺麗で可愛い美人さんが、こんなにも僕のことを好きだと思ってくれてるのに、その気持ちに答えないで何が男だよ！

ごめんね、母さん。・・・でもね、気付いたんだ。

エメのことが大切だからって、まだ会ってから1日しか経ってないからって、僕は自分の気持ちに嘘をついてたんだ。

思ったら、初めてエメに会ったときからずっと心臓のドキドキがとまらなかった。・・・まぁ、あの時はそのドキドキが恐怖から来るものだと思ってたけど、違った。

僕はエメのことが好きだ。愛してる。

うん、なんだ簡単なことじゃないか。好きな気持ちに時間とか理由とか関係ないんだよね。

好きだから好き。・・・うん。

「エメ、僕もエメのこと好きだ・・・よ？」

「よいしょっと。」

「えっと、何してるのエメ？」

僕がそんなことを考えている間にエメは、僕の腕の中から抜け出し、

その・・・ぐちょぐちょに濡れそぼった下着を脱いでいた。

「うん、私もアナが好き！・・・だから、アナに私の初めてあげようと思って。」

・・・あ、そうか。まだ続いてたのね。

そしてみるみる内に裸へとなったエメ。

その体は、全身漆黒の肌に包まれており、まるで漆のような艶をもったその肌はみるからに弾力がありそうで、ついつい触れてしまいたくなりそうな程であった。

ましてや、エメの適度に引き締まった手足や括れた腰、豊満な胸が男を惑わす魅力を周りへと振りまいていた。

・・・あ、あそこ毛も銀色なんだ。愛液のテカリと相まってすごく綺麗・・・・・

・・・って、そんな惑わされてる場合じゃなくて！

「いや、でもそんな急ぐようなことでも・・・」

「い～～～や♪」

「ひゃうううううううううう！」

「んっ、くぅぅぅうううううううううう！！」

そういうやいなや、エメは僕の上にまたがり、その濡れそぼった秘所に僕の大切な部分をあてがった・・・

・・・・あんっ♪

・・・うぅ、そこはぁ♪

・・あんっ、一緒に♪♪

イックぅぅうううう！！

～回想、終了～

・・・思えば、今までエメが僕を舐めたり、僕のことをおいしいって言ったりしていた時のエメからは全然、敵意とか悪意とかそういう感情は微塵も感じたことはなかった。

僕は、自分が作り出したありもしない想像に恐怖していたんだ。

それに、その時のエメからはむしろ愛情とか優しさといったものさえ感じていた。

そしていつしか、僕もエメの一挙手一投足が気になったり、自然とエメのことを目で追うようになっていた。

でも、今まで恋とは無縁の生活をしていた僕は、その感情に戸惑い、いつしかその戸惑いが恐怖に変わってしまって、エメの側から離れたいと・・・そう思うようになっていたのかもしれない。

でも、エメの強い愛情が僕に“恋”という感覚を芽生えさせてくれたんだよね。

・・・大分、やり方は乱暴だったけど、クロエお姉ちゃんは無事だし、エメの本当の気持ちには気付けたし、うん、・・・結果良ければ全てよし！

・・・というわけで、僕はエメに、エメは僕にそれぞれの大切な“初めて”を交換しあいましたとさ。／／／／

・・父さん、母さんごめんなさい。僕はいつのまにかこんなに淫らな子になってしまいました。

でも僕は後悔していません。

絶対、男としてエメのこと幸せにするからね！

僕は、僕の上で幸せそうな笑みを浮かべながら眠るエメを見ながらそう誓い、迫り来る睡魔に意識を手渡した。

そして少年は男になる　～ｏｖｅｒ　１５　ｗｏｒｌｄ～（後書き）

ここまで読んでくださり、誠にありがとうございます。ｍ（＿＿）ｍ

今回は１５禁バージョンということで、内容は１８禁パートの内容を１５禁の内容に修正しただけということで、すでに１８禁パートをお読みくださった方々には申し訳なかったのですが、１８歳未満の読者の方のためにも何卒ご了承くださいませ。

そして、この先もまた１８禁パートと１５禁パートで分かれることがあると思いますので、少し混乱させてしまうこともあるかと思いますが、これからもよろしくお願いできましたら幸いです。

そして少年は脇役になる（前書き）

今回の話はクロエ視点で進ませていただきます。

次話からまたアナの一人称視点に戻りますので、ご了承の上お読みください。

そして少年は脇役になる

～クロエ視点～

「・・・んっ、んぅぅうう～～、けほっけほっ。・・・・・・」

私・・・いったいどうしたんですの。

なんだか、首の辺りがジンジン致しますの。

それになんだか脳に酸素があまりいってなかったみたいにクラクラいたします・・・・の！？

「って、そうですの！確か私、アナちゃんに告白して、それでファーストキッスも捧げちゃって・・・キャッ、ですの♪・・・ってそうじゃなくて。」

時間と共に脳に酸素が行き渡り、意識と記憶がはっきりとしてきた。

そう、それでアナちゃんも私のことが好きで、もっと私のこと知りたいっていって・・・それで、それで、もっと私のこと教えてあげようとして・・・・はっ！？

「そうですの！あんのおぞましい化け物が私を壁にたたきつけて、それでそれで・・・はっ！アナちゃん！？」

私は、意識が途切れる寸前に見た、アナちゃんが身を呈して私を助

けようとしてくれた姿を思い出した。

そして私はすぐにその愛しい小さな姿を探すため、周囲に視線を走らせた。

その姿はすぐに見つかった。

「なっ！？・・・」

しかし私の目に映ったその愛しい人の姿を見て私は目を見開いた。

・・・どっ、どうしてですの！？

愛しい人・・・アナちゃんは、私の倒れていた場所からほんの数m先に横たわっていた。

その姿は、私が着せたフリフリの可愛い服を激しく着崩しており、頬は上気し、着崩したことによって露になった肌は、その魅惑の汗でキラキラと輝いており・・・そして、下半身を露出させていた。

・・・あっ、あれがアナちゃんのおしべちゃんですの・・・白くて、先がピンクで可愛いですの／／／・・・って違いますの！

うん、襲いたくなっても１００％アナちゃんのせいにできるくらい魅惑的で可愛らしい姿をしているアナちゃんの今の姿は・・・この際、いいですの。むしろ眼福ですの。

でも・・・しかし・・・・

「その上に乗っかっているその黒い物体はなんですの！？」

そう、私の可愛いアナちゃんの上には黒い物体・・・もといダークエルフ族の女が覆いかぶさっていた。

「しっ、しかも・・・なんで裸ですの！？」

よりにもよって裸で、しかもこちらも頬は上気し、体は汗まみれ、そして・・・

「なっ、なんて幸せそうな寝顔ですの・・・」

＞ｉ２３００７―１７２８＜

私の記憶の最後に映るこの女の顔は、それはそれは恐ろしいもであったはずなのに、今のこのだらしない顔はなんですの。

「しかも私の愛しいアナちゃんの上に跨って・・・うっ、羨ましいですの。」

ってそうじゃなくてですの！・・・これじゃ、まるで・・・

「まるで、二人が情事を行った後みたいじゃないですの！！」

なんで、どうしてですの？

・・・って、そうですの。

私のせい・・・ですのね。
アナちゃんは私のためにこの女の犠牲に・・・うううっ！
怒りが沸々と湧いてきましたの。
私は大またで、その女のもとに近付いていった。
「・・・この女が。」
近くで見ると、ムカつくぐらい綺麗で満足そうな顔をしてますの。
「んっ・・・」
するとその女は、艶かしい声を出して身じろぎをした。
その拍子に体の向きがわずかに横になり、体の前面が露になった。
「・・・なっ、なかなかの大きさじゃありませんの。」
そこには、二つの熟れた美しい果実が実っていた。
・・・くっ、私より大きいじゃありませんの。
そして私はその視線を下へと移した。
「くっ・・・」
そこにはもちろん、その女の性器である割れ目が覗いていたのだが、

そこからは白い中に赤い筋の混じった液が流れ出ていた。
それはまさしく、二人が同意の上かどうかは別として、情事を交わしたという事実を物語っていた。
「・・・・」
私の中にとても粘着質で、自分でも吐き気がするほどドロドロとした熱が宿るのを感じた。
「私が・・・私が初めてをもらうつもりでしたのに・・・」
悔しい。
私があんなヘマをしなければ、私がもっと強ければこんなことにはならなかったのに。
私は嫉妬の炎や自分の弱さに押しつぶされそうだった。・・・
「・・・って私は何をやっていますの。・・・一番つらかったのはアナちゃんなのに。」
そうだ、嫉妬も、自分の弱さに嘆くのも後ですの。
今は、早くアナちゃんを助け出さないと。
幸い、私とアナちゃんを襲ったこのダークエルフの女は、アナちゃんを征服した快感からか深い眠りに落ちている。
「・・・顔を一発でも殴ってやりたい所ですけど・・・」

私は女を殴ってやりたい、殺してやりたい衝動を必死で抑えた。

・・・殴ったところで、殺そうとしたところできっとこの女は無傷で私なんか糸も簡単に殺してしまえる力を持っていることは否定しようもない事実。・・・耐えるんですの、私！

私は震える手を抑え、その女の下敷きになっているアナちゃんを助け出そうと、アナちゃんに手を伸ばした。

「・・・うんしょっ、うんしょっ！もう少しっ・・・ですの！」

ーーーズル、ズル。

「・・・んぅ～」

「！？」

そして、もう少しでアナちゃんをその女の下から助け出せそうとした時、その女が声を発した。

・・・おっ、起こしてしまいましたの！？

私はアナちゃんの体を両手で掴んだ状態のまま、少しの音も出すまいと静止していた。

「・・・ふぅ～。ｚｚｚ・・・ｚｚｚｚ」

「ふぅ～、ですの。」

すると、少し身じろぎをしたあと、その女はまた規則正しい息遣いを始め、深い眠りへと帰っていった。

私は吹き出る冷や汗を拭いながら、なんとかアナちゃんをその女の下から助け出すことに成功した。

「・・・やった！ですの。」

私はそのまま眠ったままのアナちゃんを連れてこの場を離れようと思い、アナちゃんの首の後ろと、両膝の後ろに手を回した。

「・・・ううん。・・・んん？」

するとその刺激のためか、眠りが浅かったためなのか、アナちゃんは眠りから目を覚ました。

「アナちゃん・・・ごめんですの。私のせいでこんな目にあわせてしまって・・・」

私は一言そう謝まった。

「こんな言葉だけじゃ済まされないことは分かっていますの。でも、今は一刻も早くここから離れないといけませんの。」

私はそう言い、アナちゃんの首の後ろと両膝の後ろを手で支えながら立ち上がった、いわゆるお姫様抱っこをして、そのままこの長年すみ続けてきた住処を脱出しようとした。

「まっ、待って！」

そして、今まさに一歩を踏み出そうとした瞬間、アナちゃんは私の首元を両腕で掴み、そう大声をあげた。

「あっ、アナちゃん！？シーーーーッ！ですの！！あの化け物が目を覚ましたら、今度こそ私たち殺されてしまいますの。」

私は慌てて、人差し指を口元に持って行こうとしたが、両手が塞がっていたので、口だけで「シーーーッ」という言葉を発して、アナちゃんに静かにするよう促した。

しかし、そんな私の制止も聞かずアナちゃんはその口を閉じなかった。

「違うの！違うんだよ、クロエお姉ちゃん！エメは・・・」

「シーーーーッ！ですの！！アナちゃん、お願いだから静かにしてくださいの！あの化け物にかかったら、私たちなんか「やめて！！」！？」

私は再度アナちゃんを静かにさせようと、再度アナちゃんを諭そうとしたが、私が言い終わらない内にアナちゃんは急に大声を出した。

「・・・」

しかし、今度の大声はさっきまでの声とは違い、必死さが伝わってきて、私の方が黙りこんでしまった。

なんで？なんで、私たちを傷つけたあの“化け物”を庇うんですの？

私は驚きと苛立ちに満ちた表情でアナちゃんを見つめた。

そんな私を、アナちゃんは目に涙を溜めながら、今にも泣き出しそうな表情をしながら言った。

「やめてよ。誰かを化け物呼ばわりなんてしないで・・・そんなこと言うクロエお姉ちゃんなんて、嫌いになっちゃうよ。」

震える声で、必死に自分の気持ちを伝えようとするアナちゃんの声に、頭に血が上っていた私は少し冷静さを取り戻した。

「・・・ごめんですの。」

その言葉は自然と私の口をついて出た。

だって、あの女にころされるよりなにより、アナちゃんに嫌われたくなかった。

ほんの数時間しか会っていないアナちゃんに、私はいつのまにか彼無しでは生きられない程に、それほどに心酔していた。

だって・・・あんな、カッコいい姿まで見せられたらただでさえ好きだったのに、さらに好きになっちゃうに決まってるじゃありませんの！

私は、とても可愛らしい姿とは逆の、私を命がけで助けてくれたアナちゃんの姿を思い出して頬を染めていた。

「それに今回は僕が全部悪いんだ。僕が勘違いしてしまったせいで・・・だからクロエお姉ちゃん、あのダークエルフの女の人を化け物呼ばわりしないで、お願い。」

ふぁあああ～、そっ、それは反則ですの！？

アナちゃんは両手を顎の下あたりで組んで、両目を涙で潤ませながら、上目遣いで私を見上げて、そう懇願した。

＞i23006―1728＜

かっ、かわい過ぎですの。

そんな顔されたら、なんでも言うこと聞いちゃいますの。

「わっ、分かったですの。もう化け物呼ばわりしないですの。」

私は惚けた表情でそう答えた。

・・・でもアナちゃん、なんだかあの女と知り合いのような口ぶりでしたけど、どういうことですの？

そういえば、先ほども「僕が勘違いしてしまったせいで」って言ってましたの。

「アナちゃんは、あの女のこと何か知っていますの？」

私は疑問に思いアナちゃんにそう尋ねた。

「あっ、うん。そうだよね。まずはそこから話さないと・・・実はね・・・・」

おっ、驚きですの。

あれから私は、アナちゃんとあの女・・・エメという名前らしいダークエルフの女との関係について詳しく聞いた。

森の中でイノシシに追いかけられている所を助けられたこと、その後エメの家に連れ込まれたこと、その後エメの愛情表現をアナちゃんが勘違いをして解釈してしまったことなどなど、ここに至るまでの経緯を事細かに聞いた。

・・・もちろんお姫様だっこの状態のままで。

だって、アナちゃんって柔らかくて、スベスベで触れてるだけで幸せなんですの。

それに恥ずかしそうにしているアナちゃんがこれまた・・・はっ、危ない危ない、余りの可愛さに意識が飛びかけましたの。

「・・・だから僕、クロエお姉ちゃんのことも好きだけど、エメのことも好きで・・・そっ、その・・・あの・・・・エメとエッチなことしちゃって・・・その・・ごめんなさい！」

「・・・・・え？」

一瞬にしてピンク色に染まっていた私の思考は止まった。

え？

ってことは、あの女としたエッチは、レイプじゃなくて・・・・和姦ってことですの？

「ってことは、同意の上でエッチをしたってことですの？」

「う・・・うん／／／／」

私の問いに、恥ずかしそうに頬を染めながら答えるアナちゃん。

その上気した頬が、アナちゃんが本当のことを言っているのだという事実を如実に語っていた。

――――ぷちっ。

「？・・・何か音がしたような。」

周りを見回すアナちゃん。

・・・フフフフ。そぉ～ですのね。

その時、私の中で何かが音を立てて切れた。

「ふふふふふ、そうですのね。好きなら仕方ないですの。」

「ひぇっ！？」

急に不気味に笑い出した私に、アナちゃんは可愛く腕の中でプルプルと小刻みに震えていた。

私は、アナちゃんが逃げ出そうとしても逃げられないようガッチリ腕でホールドし、ありったけの嫉妬の炎を宿した笑顔をアナちゃんに向けた。

「でも、そうですねぇ～。確かアナちゃん私のことも好きっていってませんでしたの？」

「・・・うぅ、うん。クロエお姉ちゃんも大好き・・・だよ？」

怯えながらも、懸命に答えるアナちゃん。

その健気なところがまた可愛いですの。

でも今は、心を鬼しますの。

「ではおかしいですのねぇ。確か、私の時はセックスはダメだって、もっとお互いを知るまで待ってって言われた気がしますの。」

「うぅ～、えっと、それはね、その・・・」

しどろもどろになるアナちゃん。

「こんなにアナちゃんのことを愛していますのに、あのエメってダークエルフにアナちゃんの初めてを奪われて・・・いくら心の広い私でも、さすがに傷つきましたの。」

一転、今までの責めの口調から、今度はアナちゃんの良心に訴えかけるように、いかにも傷付きましたという表情を作り、そう言った。

これぞ押してダメなら引いてみる作戦ですの！

「あの・・その、ごめんなさい、クロエお姉ちゃん。ひっく。・・・僕が悪かったの。僕が勘違い、ヒック、勘違いなんかしたから、エメもクロエお姉ちゃんも傷つけて・・・ごめんなさい。」

泣きながらも懸命に謝るアナちゃん。

その姿はさながら、母親に怒られている小さな子供のようであった。

「謝られるだけじゃ、この心の傷は治りませんの。」
私は、今にもアナちゃんを強く抱きしめて慰めてやりたい衝動を必死に抑えた。
あともう少し、あともう少しですの。
「ひっく・・・どうしたらいいの？」
首をかしげながら、許しの方法を問うアナちゃん。・・・・たっ、耐えるですの！私！！
「そうですのね～～。・・・ふふふ。アナちゃん・・・チェリーは一房に２つ実るんですのよ？」
「え？」
「だから・・・アナちゃんの二つ目のチェリーを私にくださいですの。そうしたら、アナちゃんのこと許してあげますの。」
「チェリー？・・・あの、僕のあげられるものだったらいいよ。・・・でも、チェリーってどうやってあげればいいのかな？」
ふふふふふっ・・・・やった！やりましたの！！

「じゃっ、じゃあまずは・・・そこに四つんばいになって欲しいですの。」

私は裏返りそうになる声をなんとかこらえてそう言って、アナちゃんを地面に降ろした。

「こっ、こう？」

これから何をされるのか分かっていないアナちゃんは、私の言ったことに対して何も疑いを持つことなく四つんばいの姿勢をとった。

すると当然私の目の前にはその魅惑的なお尻が向けられる訳で・・・・

「うっ・・・また鼻血が・・・もうなんてプリチーなお尻なんですの。・・・しゃぶりつきたいですの・・ジュルッ・・・・・ってそんなことしてる場合じゃないですの。・・・じゃあ、アナちゃんはそのままの状態でいるですの。・・・もし、逃げ出したり、抵抗したりしたら嫌いになっちゃいますからね。」

「うっ、うん。」

「それじゃあっと。」

「ふえ？なっ、なんでパンツを脱いでるの？」

ゆっくりと、わざとアナちゃんに見えるように脱いでいく。

「だっ、ダメだよ。見えちゃうよぉ。」

そう言いつつ一生懸命私の方を見ないように目を瞑るアナちゃん。・・・ふふふ、健気に見ないように頑張っちゃって、可愛いですの。

そしてついに私はお気に入りのフリフリショーツを全て脱ぎ、スカートを両手でたくし上げた。

＞i23009―1728＜

「ふふふ、全部脱ぎましたの。・・・アナちゃんこっちを見てくださいの。」

「でも、それじゃ・・・」

「見るですの。」

少し語気を荒げてアナちゃんに命令する私。

そして、私に対する負い目があるためか、ゆっくりとしかし確実に、自分の意思と戦いながらも私の言うことを聞いてこちらを向くアナちゃん。

「ううぅ・・・・」

そしてアナちゃんの目の前に現れたのは・・・

魅惑の白い丘・・・・

「・・・・・・え？」

・・・・に立った、一本の浅黒い巨木であった。

＞i23008－1728＜

「えっ、ええええええええええええええええええええ！？」

「うふふっ、ですの♪」

そして少年は脇役になる（後書き）

ここまで読んでくださり、誠にありがとうございましたm（＿＿）m

・・・もはや１８禁小説として出した方がよかったんじゃね？というような内容になりつつあり、１８禁パートとの行き来で読者の方には面倒をおかけして誠に申し訳ないのですが、一度投稿してしまったからには、曲がりなりにも最後までやり切りたいと思いますので、よろしければどうか生暖かい目で見守ってくれますと助かります。

そして少年は女になる?～ｏｖｅｒ　１５　ｗｏｒｌｄ～（前書き）

今回は１８禁の描写の部分だけ割愛させていただいております。

１８禁部分のパートは別で投稿させていただいておりますので、１８歳以上の方で興味の御ありの方は、後書きのリンクより移動して読んで頂ければ幸いです。

そして少年は女になる?～ｏｖｅｒ　１５　ｗｏｒｌｄ～

それはとても信じられない光景だった。

「ふふふ。」

妖艶に笑うクロエお姉ちゃんは紛れもない美少女である。

可愛らしい顔立ちや、大きくはないものの美しい形をした双丘、括れた腰、それら全てが彼女が美しい“女性”であることを物語っている。・・・はずである。

でも・・・

「さぁ～、アナちゃん♪・・・覚悟はいいですの?」

そんなクロエお姉ちゃんの股間には・・・

お、おちん○んが生えていたのだ。

「なっ、なんで！？」

それは、可愛らしい顔立ちをしたクロエお姉ちゃんの印象とは全く逆の印象を持った、とても大きく、そして浅黒い色をした紛れもない男性器であった。

「え？え？・・・クロエお姉ちゃんって・・・男の人・・・なの？」

僕は驚愕に目を見開き、クロエお姉ちゃんの股間から目が離せなかった。

クロエお姉ちゃんのモノは、興奮しているためか、時折ピクンピクンと揺れ動き、表面には太い血管がありありと浮かんでおり、とてもクロエお姉ちゃんの股間から生えているものだとは思えない程であった。

「ふふふ、驚きましたの？」

そんな驚きに身動きが取れない僕を見て、まるで悪戯が成功した子供のような笑顔ではしゃぐクロエお姉ちゃん。

「ってことは・・・本当に男の・・」

「う～～ん、半分はずれですの。」

「半分？」

え？どういうこと？

困惑する僕にクロエお姉ちゃんは笑顔のまま正解を教えてくれた。

「ほら、もっと下の方を見てみるですの。」

僕はクロエお姉ちゃんの言う通りに視線を、そのクロエお姉ちゃんの巨根から下げてみると・・・

「・・・・・／／／／／！？」

え？・・・・えええ！？

そこには、ぐちょぐちょに濡れそぼった・・・・女性器があった。

「え？え！？どういうこと！？」

僕は生で見る女性器に赤面しつつも、驚きの方がまさりクロエお姉ちゃんの股間から視線を外せず、四つんばいで後ろを振り向いた状態のまま混乱していた。

「ふふふふ、そうですの。・・・私には男性器と女性器がある・・いわゆる両性具有というやつですの。」

「りょ、リョウセイグユウ？」

「そうですの。実は獣人族の中でも私の種類の種族はとても子供ができる確立が低いんですの。・・・だから自然と進化の過程の中でこんな身体になっていったんですの。」

・・・父さん、母さん。世界は不思議でいっぱいみたいです。

僕はもう何がなにやら、とりあえず目の前の現実を受け止めるのに精一杯になっていた。

「っと、まぁそんな些細な問題はおいといて～♪」

「些細じゃないよ！？」

「もう、細かいことを気にする男はモテませんの。」

そう言いながらも、混乱する僕を尻目にクロエお姉ちゃんは四つんばいになった僕のスカートをたくし上げ、着実に準備を進めていった。

「はぁわ～、アナちゃんのお尻の穴、ヒクヒクしてて可愛いですの～♪ペロっ♪」

「きゃう！？」

そしておもむろに僕のお尻の方に顔を近づけたかと思うと、急に僕のお尻の穴を舐め上げた。

「ちょっ！？クロエお姉ちゃん！？きゃうっ！きっ、汚いよう！はうっ、そんなところ」

僕はまたもや大好きな人に、自分の恥ずかしい場所を責められ、羞恥に顔を真っ赤に染めた。

「ちゅっ、くちゅ、んぅ～～っちゅっ、汚く、ちゅっ、ない、んぅ、ですの、れろっ。・・・ふふふ、アナちゃんの身体はどこも甘くて綺麗ですの。自信をもっていいですの！」

・・・いや、そんな自信は持ちたくないです。

「うううぅ～～・・・ん？・・・ってことは、もしかして・・・」

そして僕はお尻の穴を舐められるという羞恥に耐えながら、ある思考に達する。

「んちゅ。うふ♪ようやく気付きましたの？・・・そうですの、アナちゃんの持ってるもう一つのチェリー・・・後ろの処女を頂きますの！」

「はっ、はいいい

「そんなに心配しなくても、私もこういう経験は初めてですから安心しますの。」

・・・いやいや、そっちの心配じゃないから！

「って、すっごい慣れてる気がするんですけど。」

「心外ですの！こう見えても私は、男の方も女の方もまだ未経験ですの。・・・だっ、だから・・・余計に興奮してますの。ハァ、ハァ。」

そう言いながら、クロエお姉ちゃんは興奮が高まりつつあるのか、目は血走り、頬はさらに上気し、息遣いも荒くなっていた。

ひひ～～ん、怖いよ～～。

「お、お願い。それだけはやめて。他のことならなn・・・「ぬぷっ」ひゃっ！？」

なんとか男としての尊厳だけは守ろうと、やめてくれるようお願いしようとしたその時、クロエお姉ちゃんは僕が言葉を言い終わらない内に、その熱い欲望を僕に突き刺していた。

「はぁぁぁあ～～～ん、ですの♪」

そしてその日僕は女の子のような媚声を上げ、人として大事なものを得、男として大事なものを失うのであった。

そして少年は女になる?～ｏｖｅｒ　１５　ｗｏｒｌｄ～（後書き）

ここまでお読みくださってありがとうございました。

１８歳以上の方には、本章で割愛させていただいた１８禁描写の部分も別で投稿させていただいておりますので、もしよろしければ下記のリンクからお読みになってくださいね。

※１８禁パートＵＲＬ（ｈｔｔｐ：／／ｎｏｖｅｌ１８．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ６５８１ｓ／３／）

※ちょっと重要なお知らせ

>i23929—1728<

>i23930—1728<

>i23931—1728<

>i23932—1728<

>i23933—1728<

>i23934—1728<

>i23935—1728<

>i23936—1728<

>i23937—1728<

>i239938―1728<

・・・・と、いうわけで。

読者の皆様、誠に申し訳ないのですがこれからのこちらの小説の更新は不定期となります。

本当にごめんなさいです。

一週間以内更新から始まり、二週間以内更新を公言しておきながらこの始末。・・・本当にどう罵られ様と甘んじで受ける覚悟です。

ただ・・・どんなことがあろうとも、小説を途中でほっぽりだして完結させないという事態だけにはさせません！！

・・・説得力ねぇ～。（＞０＜）

でもこれだけはマジです。

ですので、こちらの小説をお読みくださっている方々には申し訳ないのですが、私の私情によりこれからは不定期更新となります。

本当に申し訳ないです。ｍ（＿＿）ｍ

でも、またプライベートが落ち着いてきましたら定期更新に戻すつもりです。

・・・・それでは、そろそろある二人の方から受けた傷が開いてきましたのでこの辺りで・・・ごふっ！

Ｉ'ｌｌ　ｂｅ　ｂａｃｋ！

・・・・いやいや、不定期でも更新するけどね！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0290s/

エルフ族の場合

2011年5月16日13時43分発行